

### 「利子生み資本」（『資本論』第3部第21章） の草稿について：第3部第1稿の第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

56

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

69

(発行年 / Year)

1988-09-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008490>

KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review)  
Hosei University, Tokyo, Japan  
Vol. 56, No. 2, 1988

## 「利子生み資本」(『資本論』第3部 第21章)の草稿について

——第3部第1稿の第5章から——

大谷 禎之介

はじめに

『資本論』第3部のエンゲルス版(現行版)第5篇第21章「利子生み資本は」、マルクスの第3部用の草稿のうちの「第1稿」すなわちいわゆる「主要原稿」の286—295ページからまとめられたものである。

エンゲルスは、「第1稿」の第5章を使って「第5篇」の印刷用原稿をつくりあげたが、この作業が第3部の編集作業全体のなかで最も大きな困難をきたしたものであり、この作業を長引かせたのであった。しかし、そのなかでもとりわけ困難であったのは、マルクスの草稿の第5章のなかの、それぞれ項目番号をもつ6つの項目のうち、第5の項目である「5) 信用。架空資本」を編集することであった。この「5) 信用。架空資本」からエンゲルスは第5篇の第25—35章をつくった。それ以前の4つの項目はそれぞれ第21—24章の各章となり、最後の第6の項目は第36章となった。<sup>1)</sup>

第5篇の最初の章、すなわち第21章となったのは、草稿第5章の6つの項目のうち最初の項目であり、草稿では「1)」という項目番号がつけられている部分である。ここには項目番号があるだけで、表題はつけられていないが、エンゲルスはこの章に「利子生み資本」という表題をつけた。第3部への序文のなかで彼が、「第21章から第24章まではだいたいでき上がっていた」(MEW, Bd. 25, S. 13)、と書いているように、エンゲルス

## 2 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

版のこの章の内容は、マルクスの草稿とほぼ一致している。ここでのエンゲルスの作業の大半は、それまで彼が第3部の草稿の整理をするのにとってきたしかたで個々の文章を手入れすることと、草稿での注や追記を印刷用に整理・配置することとであった。

本稿では、第3部第1稿についてのこれまでのいくつかの拙稿<sup>2)</sup>と同様に、エンゲルス版第21章の草稿、つまり草稿第5章の「1)」を調べ、それとエンゲルス版との相違を示すことにするが、そのまゝに、この第5章全体の主題と構成、そして「利子生み資本」の概念などについて、若干の予備的考察をしておくことにする。なお、草稿とエンゲルス版とは篇・章・節などの項目名の使い方にずれがあるが、以下では、項目名はすべて草稿のそれによることとし、必要に応じてエンゲルス版のそれを括弧書きすることとする。

- 1) 草稿第5章の全体の概観ならびにエンゲルスの編集作業については、拙稿「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(上)、『経済志林』第51巻第2号、1983年、を見られたい。
- 2) 以下のものを参照されたい。「貨幣取扱資本」(『資本論』第3部第19章)の草稿について、『経済志林』第50巻第3・4号、1983年。「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)、『経済志林』第51巻第3号、1983年。「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章)の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、1985年。

### 1. 第3部第5章の主題と構成

第3部第5章の主題と構成についてはすでに概括的に述べる機会があった<sup>1)</sup>が、ここであらためて、それを簡単にまとめておきたい。

第5章(第5篇)の主題は、「利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂。利子生み資本」という、マルクス自身の表題に明瞭に示されている。マルクスは第3部の冒頭のパラグラフで第3部の課題について「問題は、資本の過程——全体として考察されたそれ——から生じてくる具体的諸形態を見つけ出して叙述することである」<sup>2)</sup>と述べてい

るが、この表題のうち前半の「利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂」という部分が、第3部の他の多くの部分の表題と同様に、同時に分配形態であり収入の形態でもある剰余価値の転化形態、すなわち剰余価値の「具体的形態」に即してこの章の主題を示しており、後半の「利子生み資本」は、同じ主題を資本の「具体的形態」に即して示していることは明らかであろう。これをさらに簡潔に言い表わせれば、第5章の主題は、剰余価値の分配形態に即して言えば「利子」、資本に即して言えば「利子生み資本」ということになる。

草稿第5章は次の6つの項目からなっている。

「1) (表題なし。)

「2) 利潤の分割。利子率。利子の自然率。」

「4) (表題なし。「4)」は明らかに「3)」の誤記であり、以下では「3)」と呼ぶ。」

「5) 利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外面化(「5)」は明らかに「4)」の誤記であり、以下では「4)」と呼ぶ。)

「5) 信用。架空資本。」

「6) 先ブルジョア的なもの。」

内容から見て、これらは次の3つの部分に分けることができる。

第1は「1)」から「4)」までの部分であって、ここでは、利子生み資本の最も単純な姿態を対象に据え、これを分析することによって利子生み資本の概念、本質を明らかにし、この本質把握にもとづいて「利子生み資本の姿態」と「利潤にたいする利子の自立化」とを展開し、最後に、この展開のなかで明らかになってくる、利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係の物象化を総括している。このような第1の部分の内容を一言でいい表わすとすれば、「利子生み資本そのものの一般的分析」と呼ぶことができるであろう。エンゲルス版では、第21～24章である。

第2は「5) 信用。架空資本」の部分であって、ここでは、第1の部分

#### 4 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

です。すでに明らかにされた利子生み資本の概念と基本形態とを前提にして、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なかぎり、利子生み資本の具体的諸形態・諸姿態を明らかにしようとしている。資本主義的生産様式のもとにおける利子生み資本の具体的諸形態・諸姿態とは、信用制度のもとにおける利子生み資本の諸形態にはかならない。だからこの部分の内容は「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」と要約することができるであろう。ただし、それらの姿態を全面的かつ包括的に論じようとしているのではなく、『資本論』の課題である「資本の一般的分析」の枠内で、それに必要なかぎりで行おうとしているにすぎない。このことを、資本の姿態そのものに即してさらに具体的に表現するならば、ここでの分析は、貨幣市場における利子生み資本の一般的形態である「貨幣資本(monied capital)」の諸姿態——その最も大量的かつ典型的な存在形態は銀行に集積された貸付可能な貨幣資本(loanable monied capital)の形態である——の分析である、ということが出来る。したがって、「貨幣資本(monied capital)」という言葉がこのような意味で用いるならば(そして、マルクスはこの語を最も多くこのような意味で用いているのであるが)、この第2の部分は端的に「貨幣資本(monied capital)論」と呼ぶことができるであろう。エンゲルス版では、第25~35章にあたる。<sup>9)</sup>

信用制度のもとでの利子生み資本の諸姿態を分析しようとするこの部分では、まずなによりも、信用制度そのものがどのようなものであるかが明らかにされていなければならない。エンゲルス版の第25章および第27章にあたる草稿部分では、信用制度とはなにか、それは資本主義的生産においてどのような意義をもち、どのような役割を果たすのか、ということをも明らかにしようとしている。これはまさしく「信用制度の分析」と呼ぶことができるから、そのかぎりでは、第5章、とりわけその「5)信用。架空資本」は信用制度の分析を含んでいるということが出来る。しかし、この分析は、信用制度下の利子生み資本の諸姿態の分析のいわば前提として、その準備過程として行なわれているものにすぎず、信用制度そのものを対

象とする本格的な分析ではない。だからこそマルクスは、だれの目にも信用制度が論じられていることが明らかな、まさにその部分にはいるところで、「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある。ここではただ、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかの点をはっきりさせるだけでよい」<sup>4)</sup>、と書いたのである。この断り書きは、「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析」が、つまり信用制度そのものを対象とする本格的な分析が、『資本論』のそとにさらに残されていることを明らかにしている。そして、この序論的な信用制度分析を終えて、いよいよ本論にはいろいろとするところ（エンゲルス版の第27章の終りに近いところ）で、「いまわれわれは、利子生み資本そのもの〔信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本がとる形態〕の考察に移る」<sup>5)</sup>、と記したのであった。ここで言う「利子生み資本そのものの考察」とは、いうまでもなく、すでに第1の部分で終えた利子生み資本の一般的分析を前提にしての、monied capital の分析にほかならない。エンゲルス版第28章からこの「monied capital 論」の本論部分が始まるが、その具体的な内容については、ここでは取上げないことにする。

草稿第5章の第3の、最後の部分は、「6) 先ブルジョア的なもの」であって、ここでは、利子生み資本の前資本主義的な形態である高利資本が、すでに明らかにされた近代的な利子生み資本の概念を前提して、それとの対比において分析され、さらに、産業資本がこの高利資本を、とりわけ信用制度の創造によって、自己に従属させ、近代的な利子生み資本を生み出すにいたる歴史的過程の基本的な筋道が述べられている。利子生み資本（および信用制度）について、すでに理論的な解明がなしておえられているここで、はじめてその歴史的生成過程を叙述することができるし、またこの生成についての叙述によってはじめて、利子生み資本の分析は完全なものとなる。エンゲルス版第36章にあたるこの部分は、「利子生み資本の

## 6 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

歴史的生成過程の考察」となっているのである。

第3部第5章は、以上のように、「利子生み資本そのものの一般的分析」および「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」からなる理論的展開と、「利子生み資本の生成過程の考察」という歴史的叙述とからなっており、全体として「利子生み資本論」となっているといえることができる。

- 1) 拙稿「『資本論』における「信用の役割」, 『信用理論研究』第3号, 1986年。
- 2) Ms. I (第3部第1稿。以下同様に示す), S. 1; MEW, Bd. 25, S. 33. 拙稿「『資本論』第3部第1稿について」, 『経済志林』第50巻第2号, 1982年, 106ページ。
- 3) 第2の部分についての以上の特徴づけは、かつて拙稿で、この部分では「信用制度と信用制度下の利子生み資本の諸形態」が考察されている、としたのを、さらに明確に表現しようとしたものである(「『経済学批判』体系プランと信用論」, 講座『資本論体系』第6巻, 「利子・信用」, 有斐閣, 1985年, 所収, 269ページ)。
- 4) Ms. I, S. 317; MEW, Bd. 25, S. 413. 拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)」, 『経済志林』第51巻第3号, 1983年, 4ページ。
- 5) Ms. I, S. 327; MEW, Bd. 25, S. 457. 拙稿「「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章)の草稿について」, 『経済志林』第52巻第3・4号, 1985年, 331ページ。

## 2. 「貨幣資本論」と「貨幣市場としての資本」

ところで、いま見た第2の部分の「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」ないし「貨幣資本論」が『資本論』のなかで占める位置について、別の角度からひとつの補足をしておきたい。

マルクスは『経済学批判要綱』の執筆の過程で「経済学批判」の体系構想を練り上げ、6部作プランをもつにいたった。その第1部「資本」は次第に、「資本一般」, 「競争」, 「信用」, の3項目に収斂していった。この三者の関連については、いくつかの観点から論じることができるが、ここで問題としている「貨幣資本」との関連においては、なによりも注目しなけ

ればならないのは、第1部「資本」の全体が、「貨幣としての貨幣」が「資本としての貨幣」に転化し、さらに「貨幣としての資本」を経て、最後に「貨幣市場としての資本」にまでいたる展開と見なされていた、という点である。<sup>1)</sup>

これは、「全生産過程の最も表面的な、そして最も抽象的な形態としての貨幣流通」の分析によって明らかにされる貨幣の最も抽象的な形態諸規定が、資本の展開のなかでより具体的に規定され、より具体的な内容規定をもつようになるということ（これはこれとして重要なことではあるが）とは異なる、貨幣そのものの展開、貨幣そのものが資本関係の発展によって新たなより高次の規定性をもつものに転化していく過程である。<sup>2)</sup> マルクスはこの展開を、「貨幣を貨幣市場としてのその総体性にいたるまで追究すること」<sup>3)</sup>と表現しているが、これはまさに「資本」の部の展開そのものにほかならない。「貨幣市場」にまでいたる展開の意味と内容については別稿<sup>4)</sup>でのべたので省略するが、最後の項目（これは「資本一般」、「競争」、「信用」の3項目に即して言えば、「信用」の最後の部分をなすものであり、また同時に「資本」の部の締め括りとなるべきものであった）となるはずの「貨幣市場」ないし「貨幣市場としての資本」とは、いま述べていた money market とそこにおける monied capital だったと考えられるのである。

六部作プランの第1部「資本」の「資本一般」は、その対象を、「多数の資本」を捨象した一個の資本（賃労働に対立する資本、国民的資本、社会的総資本）に厳しく限定したものであったから、資本の現実的運動については、この「資本一般」の項目を終えたのちに、「競争」と「信用」で取り扱うほかはなかった。だから「資本一般」は、資本および剰余価値の、人々の表象に与えられている具体的諸姿態には到達しえていない、その意味で「資本」の展開としては文字どおり未完了のものであった。

しかしマルクスは、「資本」の叙述を続けるなかで、一個の資本に厳しく限定する点においてそれに続く項目から截然と区別される「資本一般」



## 8 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

をまず「一般性」として叙述し、そこから「多数の資本」を前提する「競争」および「信用」に進むという叙述の方法を放棄した。彼は、『資本論』という著書に結晶していった「資本」についてのまとまった一般的叙述もはや「資本一般」と特徴づけることはしなくなった。それに代わって、「資本主義的生産の一般的研究」、「資本の一般的分析」、「資本主義的生産様式の内的構造の、その理想的平均における叙述」という特徴づけが現われた。その第2部の最初の書き下ろしである「第1稿」ではすでに、「多数の資本の、すなわちいろいろな産業の諸資本に分裂している総資本の過程」としての「実体的な再生産・流通過程」の諸条件の分析がその大きな部分を占めるようになり、第3部では、利潤率を異にする諸資本、生産諸部門を前提する「競争による一般的利潤率への均等化」、したがってまた「価値の生産価格への転化」が論じられ、さらに、資本の、産業資本と商業資本への分裂が論じられるようになった。「競争による一般的利潤率への均等化」を論じるさいに、競争とはなんであるか、それはどのように行なわれるのか、そしてそれは資本の法則の執行者としてどのような意味をもっているのか、というその基本的規定が明らかにされなければならなかった。

このような体系構成上の変更をもたらした、叙述の方法における部分的変更は、「利子生み資本」および「信用」、したがってまた「貨幣市場」の取り扱いにも大きな変化をもたらした。一方では、「利子生み資本」そのものが「機能資本」と区別される資本として一般的に分析されるとともに、他方では、信用制度の前提ないし基礎をなす、競争による利潤率の均等化や、貨幣取扱資本をはじめとする資本と剰余価値との諸形態がすでに考察されるようになった。「資本の一般的分析」としての『資本論』はもはや、「信用としての資本」、そしてその最後の部分となるはずであった「貨幣市場としての資本」を、分析対象の限定を超えるものとして完全に排除する理由がなくなったばかりでなく、それらへの言及の前提・基礎を欠くものでもなくなった。ただし、それが「一般的分析」である以上、「諸資本

の現実的運動」の分析としてのもろもろの分析がその外に残されているのは当然であって、6部作プランでの「信用としての資本」や「貨幣市場としての資本」で構想されていた（といってもそもそもどこまで具体的に構想されていたのかほとんど不明なのではあるが）諸問題や構想がそっくりそのままここにもちこまれたなどということがありえないことは言うまでもない。<sup>5)</sup>

ところで、じつはマルクスが『経済学批判要綱』で、さきに述べたような、「貨幣としての貨幣」→「資本としての貨幣」→「貨幣としての資本」（これは利子生み資本のことではなくて、価値の自立的な形態としての貨幣の姿をとった資本のことである）→「貨幣市場」、という展開を述べたときには、まだ、このうちの前三者は「資本一般」に属するものであり、最後の「貨幣市場」は、「信用」よりもさらにあとに位置するものとして構想されていた（すなわち、信用としての資本→株式資本としての資本→貨幣市場としての資本）。このときには、「利子生み資本」は「一般性」に続く「特殊性」（のちの競争）で論じられることになっていたのである。ところが、そのすぐあとに書かれたプラン以降、利子生み資本は「一般性」（資本一般）の最後の部分に含まれるようになったばかりでなく、むしろ、「一般性」を締め括る位置を与えられるようになった。マルクス自身は、その後はこのような「貨幣市場」にいたる展開について概括的に書くことをしていないが、利子生み資本のこのような新たな位置を前提してさきの展開を考えるならば、利子生み資本は当然に「資本一般」を締め括るものとしてそのなかで重要な位置を占めることになるはずである。その場合には、さきの展開は、「貨幣としての貨幣」（貨幣の抽象的諸規定）→「資本としての貨幣」（貨幣の資本への転化以降の資本の展開）→「貨幣としての資本」（流通過程における資本の形態としての貨幣資本）→「利子生み資本」（「商品としての資本」あるいは「資本としての資本」）→「貨幣市場」、ということになるであろう。ここでは利子生み資本は、貨幣を生む貨幣という資本の最も一般的な現象形態として、したがってまた資本一般におけ

10 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

る物象化の完成形態として、「資本一般」を締め括るべき位置にある。

以上のように見るならば、『資本論』第3部第5章の利子生み資本論のうちで、第1の部分(「1」)~「4」)が、6部作プランの「資本」の部のなかの「資本一般」を締め括る位置にあった「利子生み資本」に対応する性格をもっており、第2の部分(「5」)が、6部作プランの「資本」の部を締め括る位置にあった「貨幣市場」ないし「貨幣市場としての資本」に対応する性格をもっているといえることができる。このように、第5章の理論的展開の2つの部分は、いずれも、それぞれ別の意味においてであるが、それ以前の展開を締め括るという性格をもあわせもっているのではないかと考えられてくる。

monied capital を「貨幣市場としての資本」と考えることができるとするならば、「貨幣市場では資本はその総体性において措定されている」<sup>6)</sup>という『経済学批判要綱』での展望は、『資本論』第3部第5篇における monied capital の分析において、なにがしかの程度において実現されているはずである。マルクスが、「貨幣を貨幣市場としてのその総体性にいたるまで追究すること」と言い、また「貨幣市場では資本はその総体性において措定されている」と言うときの「総体性」とは、別言すれば、ここ、貨幣市場においては、貨幣および資本のいっさいの規定がすべて前提され、それらすべてが複雑に絡み合いながら現実性として存在しているということであろう。だからこそ、ここでは、「鑄貨としての流通手段と貨幣と貨幣資本と利子生み資本(英語の意味での monied capital)とのあいだの諸区別をごたませにしている」<sup>7)</sup>という「混乱」が支配するのであり、monied capital を分析することは同時にこの「混乱」を批判することでもなければならぬ。またさらに、ここにおいて、単純な商品・貨幣流通において抽象的に考察されていた貨幣とその諸規定は、この「貨幣市場としての資本」において、「資本の一般的分析」の限度のなかで最も具体的な諸姿態をとって現われるのであって、その意味では、貨幣論そのものもここで最終的に締め括られるのだといえることができるであろう。

『資本論』は、この第5章のあとに「第6章。超過利潤の地代への転化」が続き、そしてそのうえで「第7章。収入（所得）とその源泉」によって締め括られるのであるから、そのかぎりでは、第5章が『資本論』そのものの締め括りでないことはいうまでもないことであるが（そしてこの点が、6部作プランでの第1部「資本」と『資本論』との違いを特徴的に示すのであるが）、しかし、貨幣と資本の諸規定は、第5章の第1の部分までですべて展開されるのであって、その意味で、第5篇の第1の部分ですでに資本は「完成した資本」として現われ、そこで資本の物象化が総括されると言いうるとともに、第2の部分では、それを前提にして、貨幣と資本とが「総体性」において現われ、そこで貨幣の展開が最終的に締め括られると言いうるのである。このうち、前者については、すでに三宅義夫氏が指摘され、多くの支持者を得ているのであるが、後者の対応もあわせて注目されるべきではないか、というのが、ここで指摘しておこうとした主要論点であった。<sup>8)</sup>

- 1) MEGA, II/1. 1, S. 175-176; MEW, Bd. 42, S. 178.
- 2) この点については、拙稿「『貨幣』篇への補足』について」、『マルクス経済学レキシコンの葉』No. 14, 大月書店, 1985年, 19-23ページ, を参照されたい。
- 3) Ebenda.
- 4) 前掲拙稿「『貨幣』篇への補足』について」。
- 5) 以上のプランの変更については、拙稿「『経済学批判』体系プランと信用論」、講座『資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣, 1985年, を参照されたい。
- 6) MEGA, II/1. 1, S. 199; MEW, Bd. 42, S. 201.
- 7) Ms. I, S. 328; MEW, Bd. 25, S. 458. 前掲拙稿「『貨幣』篇への補足』について」、32ページを参照されたい。
- 8) 三宅義夫『マルクス信用論体系』, 日本評論社, 1970年, 12-15ページ, および, 292-295ページ, 参照。なお, ここで「貨幣の展開が最終的に締め括られる」とした点は, 同書での三宅氏の次の指摘に対応するのではないかと考えている。「第1部での貨幣論は単純な流通のもとにおいて貨幣に与えられる諸形態規定を考察しているという点で貨幣論自体としては一応まとまったものであるが, しかし貨幣についての叙述は信用制度下での貨幣流通を叙述しなくてはまったく不完全なものとなることを免れない。たとえば著書『経済学批判』

## 12 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

の終りの方で述べていることにしめくりがつかない。『資本論』をそれ自体で完結する基礎理論とするために信用論のとり入れが不可欠であるということは、このような事情からも生じてくる、と考えられる。」(同書、16ページ)

### 3. 「利子生み資本」

さて、ここで、この第5章のなかでマルクスが「利子生み資本」という語をどのような意味で用いているのかということ、その用例を通じて探ってみることにしよう。

もちろん、この章はまさにその「利子生み資本」の考察にあてられているのであって、この章の展開のなかで、その分析は深められていくのであり、その概念そのものも内容が次第に豊富になっていくものと考えられる。けれども、このことが文字どおりあてはまるのは、第1の部分、すなわち「1)」～「4)」における利子生み資本そのものの一般的分析についてである。ここでは「利子生み資本」の分析が進むにつれて、その概念がより深く把握されるようになり、「4)」において最終的に確定されているといえることができるであろう。

これにたいして、第2の部分、すなわち「5) 信用。架空資本」では、そのようにしてすでに明らかにされた利子生み資本の概念を前提にして、信用制度のもとで利子生み資本がとる諸姿態が展開されている。また、第3の部分、すなわち「6) 先ブルジョア的なもの」では、それに先行する2つの理論的な部分で近代的な利子生み資本がすでに解明されていることを前提にして、その先ブルジョア的な形態である高利資本を対比、分析し、そこから近代的な利子生み資本の成立過程を叙述している。だから、この第2および第3の部分では、「利子生み資本」という概念は、それ以前に理論的に解明され、その内容が確定されたものとして用いられているはずだと言わなければならない。

そこで第2の部分、すなわち「5) 信用。架空資本」のなかで、この語がどのような文脈で、どのように用いられているかを見ることにしよう。

便宜上、エンゲルス版での章名をはじめに掲げ、引用のあとに、短いコメントをつけることにする。

### 【第25章 信用と架空資本】

①「貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、[それに] 結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるいは貨幣資本 [monied Capital] の管理である。」(Ms. I, S. 317; MEW, Bd. 25, S. 415-416. 以下の引用における下線はすべてマルクスによるものである。) (これは、銀行業者のもとに集積される貨幣資本のことである。)

### 【第27章 資本主義的生産における信用の役割】

②「これまでわれわれは主として信用制度の発展 [そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な止揚] を、主として生産的資本に関連して、考察した。いまわれわれは、利子生み資本そのもの [信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本がとる形態] の考察に移るが、そのさい総じて、なお若干のとくに経済学的な論評を行なわなければならない。」(Ms. I, S. 327; MEW, Bd. 25, S. 457) (この部分については、すでに言及した。)

### 【第28章 流通手段と資本。トゥックとフラートンとの見解】

③「トゥック、ウィルソン等々がしている通貨と資本との区別は (そしてこの区別をするさい、彼らは鑄貨としての流通手段と貨幣と貨幣資本と利子生み資本 (英語で言う moneyed capital) とのあいだの諸区別をごちゃまぜにしているのであるが)、次の2つのことに帰着する。」(Ms. I, S. 328; MEW, Bd. 25, S. 458) (ここでの「利子生み資本」は、「鑄貨としての流通手段」、「貨幣」、「貨幣資本」がそうであるように、範疇としてのそれだということができよう。その範疇としての「利子生み資本」に「英語で言う moneyed capital」という括弧書きがつけられていることに注目されたい。「英語で言う moneyed capital」とは、いうまでもな

14 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

く、money market に供給され、そこで需要される貨幣資本である。)

【第29章 銀行資本の構成諸部分】

④「ところが、われわれがもっとあとの研究で明らかにするように、そのようにして「貨幣資本」が「利子生み資本」の意味での「moneyed capital」と混同されるのであるが、前者の意味では資本はつねに、「商品資本」および「生産資本」としてのそれ自身の形態から区別されたものとしての「貨幣資本」なのである。」(Ms. I, S. 335; MEW, Bd. 25, S. 481) (これも、すぐまえの引用③と同じである。)

⑤「利子生み資本という形態に伴って、確定した規則的な貨幣収入は、それが資本から生じるものであろうとなかろうと、すべて、ある資本の「利子」として現われることにならざるをえない。まず貨幣収入が「利子」に転化させられ、次に利子といっしょに、その利子の源泉である「資本」も出てくるのである。」(Ms. I, S. 335; MEW, Bd. 25, S. 482) (「利子生み資本という形態に伴って」というのは、範疇としての利子生み資本の確立に伴って、ということであろう。)

⑥「平均利率を1年15%としよう。すると、500ポンドの資本は(貸し付けられれば、すなわち利子生み資本に転化されれば)毎年25ポンドをもたらすことになるであろう。」(Ms. I, S. 335; MEW, Bd. 25, S. 482) (ここでは、「貸し付けられる」ことによって貨幣が「利子生み資本に転化する」とされていることに注目されたい。)

⑦「国家あての債務証券を売ることの可能性は、Aにとっては元金の還流または返済の可能性を表わしている。Bについて言えば、彼の私的な立場から見れば、彼の資本は利子生み資本として投下されている。」(Ms. I, S. 336; MEW, Bd. 25, S. 483) (ここでは「利子生み資本」は利子を生むべく貸し付けられている資本のことである。)

⑧「利子生み資本とともに、どの価値額も、収入として支出されないうきには、資本として現われる。すなわち、その価値額が生むことのできる可能的または現実的な利子に対立して、元金、元本として現われる。」

(Ms. I, S. 336 ; MEW, Bd. 25, S. 483) (引用⑤に同じ。)

⑨「ところで、ちょうど利子生み資本一般がすべての狂った形態の母であって、たとえば債務が銀行業者の観念では商品として現われるように、国債という資本ではマイナスが資本として現われるのであるが、この国債という資本に対比して見ることができるのは労働能力である。労賃はここでは利子だと考えられ、したがってまた、労働能力は、この利子を生む資本だと考えられる。たとえば、労賃イコール50ポンドで利率イコール5%だとすれば、1年間の労働能力イコール1000ポンドの資本、である。資本主義的な考え方の狂気の沙汰はここでその頂点に達する。というのは、資本の価値増殖を労働能力の搾取から説明するのではなく、逆に、労働能力自身がこの神秘的な物、利子生み資本なのだ、ということから、労働能力の生産性が説明されるのだからである。」(Ms. I, S. 336 ; MEW, Bd. 25, S. 483) (ここでは、利子生み資本における、貨幣を生む貨幣という、資本の物神的な姿態からもろもろの「狂った形態」が生まれてくることが指摘されている。しかしこれらの「狂った形態」そのものが利子生み資本であるわけではけっしてないことに注意しなければならない。労働力は、「利子生み資本」として観念されることがあるとしても、それは絶対的に、範疇としての利子生み資本に属するものではありえない。)

⑩「すべて資本主義的生産の国には、このような形態での巨大な量のいわゆる利子生み資本あるいは貨幣資本 [moneyed Capital] が存在している。そして、貨幣資本の蓄積というときには、その大きな部分が、この「生産にたいする請求権」の蓄積、および、これらの請求権の市場価格 (幻想的な資本価値) の蓄積のことでしかないのである。」(Ms. I, S. 338; MEW, Bd. 25, S. 486) (ここでは「利子生み資本」に「いわゆる」という語が付されていることに注目されたい。「利子生み資本」という語は、マルクスにあっては、彼の造語なのではなくて、「貨幣資本 [moneyed Capital]」と言い換えることもできる、一般的に使われている語として意識されているのである。)



16 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

⑬「預金そのものは二重の役割を演じる。一方ではそれは、いま述べたような仕方で利子生み資本として貸し出されており、したがって銀行業者の金庫のなかにはなくて、ただ銀行業者の帳簿のなかで銀行業者にたいする預金者の貸しとして現われているだけである。」(Ms. I, S. 338; MEW, Bd. 25, S. 488) (引用⑥, ⑦と同じ。)

⑭「利子生み資本および信用制度の発展につれて、同じ資本が、または同じ債務請求権でしかないものさえが、さまざまな人手のなかでさまざまな形態で現われるさまざまな仕方によって、すべての資本が2倍になるように見え、また場合によっては3倍にもなるように見える。この「貨幣資本」の大部分は純粋に架空なものである。」(Ms. I, S. 338; MEW, Bd. 25, S. 489)

#### 【第30章 貨幣資本と現実資本Ⅰ】

⑮「ところが、この権利が同様に現実資本の紙製の複製になるのである(あたかも積荷証券が、積荷とは別に、また積荷と同時に、ある価値を与えられるように)。それは、存在しない資本の名目的代表物になる。というのは、現実資本はそれとは別に存在していて、この複製品が持ち手を取り替えることによってはけっして持ち手を取り替えないからである。それは利子生み資本の形態になる。」(Ms. I, S. 340; MEW, Bd. 25, S. 494)  
(ここでは「利子生み資本」は、投下されることによって利子をもたらす資本のことである。)

#### 【第32章 貨幣資本と現実資本Ⅲ】

⑯「平均利子(かなり長い年数についての)は、他の事情が変わらないかぎり、利潤の平均率によって(それ自身が利潤マイナス利子にはかならない企業利得によってではなく)規定されていることは、すでに利子生み資本の考察のところで述べた。」(Ms. I, S. 356; MEW, Bd. 25, S. 528)  
(ここで「利子生み資本の考察」と言っているのは、いうまでもなく、本稿で「利子生み資本そのものの一般的考察」と呼んでいるものにあたる。この表現があることから、第2の部分は「利子生み資本の考察」ではない

という結論を引き出すのは、引用②の「いまわれわれは利子生み資本そのものの考察に移る」という表現から、これ以前には「利子生み資本そのもの」は考察されていなかったという結論を引き出すのと同じように乱暴であろう。）

さて、以上の引用を通覧してわかるのは、第2の部分で直接に「利子生み資本」という語が使われているときには、きわめて多くの場合、それは、機能資本家やその他さまざまな階級の手のなかで蓄積され、あるいは滞留する貨幣が、主として銀行業者の手のもとに集積され、貨幣市場において取引されることによって、利子を生んでいる、あるいは生むべく予定されている、そのような貨幣資本を、指している、ということである。マルクスはなんども「利子生み資本あるいは貨幣資本 [monied Capital]」と言い、また「利子生み資本（英語で言う moneyed capital）」あるいは「利子生み資本」の意味での「moneyed capital」とも言っているのである。

「利子生み資本の形態に伴って」、すべての資本が利子をもたらすものとして現われ、三位一体的定式の「資本——利子」という1項が確立するにしても、このことは、すべての資本がそれ自体として「利子生み資本」に転化してしまうことを意味するわけでもなく、また機能しているすべての資本が利子生み資本であるわけでもない。

また、このことから明らかになるのは、「5) 信用。架空資本」のなかで「利子生み資本」という語そのものを使っている箇所が多くないからといって、この部分では「利子生み資本」への言及がわずかだという結論を出すことができない、ということである。むしろここでは、圧倒的に、「利子生み資本あるいは貨幣資本 [monied Capital]」を簡単に monied Capital と表現しているのであり、そしてマルクスにとってこの語は、「信用制度のもとでの利子生み資本」にたいする呼称として、他の語に代えがたい適切さをもっていたものと考えられるのである。

18 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

第5章の第3の部分である「6)先ブルジョア的なもの」における「利子生み資本」については、ここで逐一引用を掲げるまでもないであろう。「高利資本」についてはいうまでもなく、また、ここで論じられる「資本主義的生産様式の本質的な1要素をなしているかぎりでの利子生み資本」<sup>1)</sup>も、貸し手から借り手に貸し付けられる、産業資本および商業資本と区別されそれと対立する特殊な資本形態としての資本であることは明らかである。

さて、第21章の草稿を見ることを主要な課題とする本稿としては、いささか一般的に過ぎるまえおきを不均衡に長く書いてきてしまった感がある。第5章の第1の部分については、すでに優れた解説<sup>2)</sup>もあるので、ここに記しておくつもりであった、この部分に直接かかわるいくつかのことはすべて省いて、本題にはいることにしよう。

1) Ms. I, S. 397; MEW, Bd. 25, S. 614.

2) 講座『資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣、1985年、の「序説」および第21~24章の「原典解説」を参照されたい。

#### 4. 第21章の草稿、それとエンゲルス版との相違

本節では、第3部第21章に用いられたマルクスの草稿を見る。これまでと同様に、草稿からの訳文をかかげ、それに、エンゲルス版(MEW版、また必要に応じて、エンゲルス自身の手にかかる唯一の版である1894年のマイスナー版——「1894年版」と略称する——)における手入れを注記する。注記する手入れ(相違)の範囲や用いる記号類は、これまでのものと基本的には同じであるが、若干の改善を加えた。なお訳文には、岡崎次郎氏の訳(大月書店刊の諸版)を土台として使わせていただいたが、ほとんどそのままとなっているところもあれば、大きく手を加えたところもある。

草稿そのものの取り扱いおよびそれへの注記にかんする約束事は、次のとおりである。

注記のさいに、エンゲルス版とは異なる、草稿でのマルクスの原文をな

るべく示すことを原則とする。エンゲルスの手入れは、訳文でも変更が生じるものばかりでなく、同じ意味の別の単語で置き換えた場合、文章構造の変更、括弧類の変更、なども注記する。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるので、原則として取らないことにする。——正書法上の変更、語順の局部的な変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の削除・挿入、前置詞などの文体上の反復挿入、同じ動作名詞の -ung 形と -en 形との交換、意味にほとんど変更をもたらさない句読点の変更、語句の局部的変更、注番号の変更、等々。

行の上などに書き込まれていることによって、あとから（といっても直後かもしれないのであるが）書き込まれたことがわかる語句は《 》で示す。

{ } は、マルクスによる角括弧、[ ] は筆者の挿入である。下線による強調は、とくに注記しないかぎり、すべてマルクスの草稿における、1本の下線による強調である。エンゲルス版では、この強調は原則として省かれた。エンゲルス版で強調されている部分（1984年版では、隔字体、MEW版ではイタリック体）は、そのつど、注記する。

マルクス自身の注は、筆者の注と区別できるようにするため、その注番号をゴシック体にし、またそのまえに「[原注]」と記す。

草稿ページは次の記号で示す。ここでの数字および語句はもちろん例示のためのものである。

- |             |  |
|-------------|--|
| 326上  Es... | ここから 326 ページ上半部が始まる。                                 |
| /326上/Es... | ここから 326 ページ上半部の中途のある部分が始まる。                         |
| ...so       | ここまでのページが終わる。  |
| ...so /     | ページの途中でいったん切れることを示す。つまり、このページにはさらに別のなんらかの記述があることを示す。 |

ここで取り扱う部分では、マルクスは各ページの上半部に本文を、下半部にそれへの注を書いている。「326上」は 326 ページ上半部を、「326下」は同じく下半部を示す。

20 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

ページの変わり目が文の中途である場合には、あとのページの最初の語の直前をその変わり目とみなす。

注のなかでは、草稿とエンゲルス版との相違は、草稿訳文の該当部分をまず掲げ、次にそれがエンゲルス版でどのようになっているかを記す、というしかたで示す。すなわち、「A→B」は、草稿中のAがエンゲルス版ではBに変えられていることを示し、「A—削除」は、草稿中のAがエンゲルス版では削除されていることを、「挿入—A」は、エンゲルス版ではここにAが挿入されていることを示す。意味の変化をもたらさない語句の変更(外国語のドイツ語への変更、文体上の統一や改善——とエンゲルスには思われたもの——のための変更、等々)については、誤解が生じないかぎり、訳文中の訳語の直後に原語を〔 〕に入れて示した(このような場合でなくても、原語を示したほうがいと判断した場合には、それを〔 〕に入れて示している)。頻出し、かつほとんど例外なく同じ原則で行なわれている変更の場合には、最初にその旨を注記し、その後のいちいちの記載を省いた(たとえば、functioniren→fungieren, Zinstragendes Capital→zinstragendes Kapital)。場合によっては、注のなかで、訳語を掲げたあとに、原語で「A→B」とする仕方で示した。これらの変更の記載は、煩瑣をさけるために、網羅的ではなく適宜取捨選択してある。

なお、「貨幣資本」ないし「貨幣資本家」の原語が monied capital ないし monied capitalist である場合には、必ずそれを〔 〕に入れて示しているので、この語がない場合には、原語は Geldcapital ないし Geldcapitalist となっているわけである。

|286上| 第5章<sup>1)</sup>利子と企業利得<sup>2)</sup> (産業利潤または商業利潤)<sup>3)</sup>とへの利潤の分裂。<sup>4)</sup> 利子生み資本。<sup>5)</sup>

- 1) 「第5章」→「第5篇」
- 2) 「企業利得 [Unternehmungsgewinn]」→「企業者利得 [Unternehmergewinn]」
- 3) 「(産業利潤または商業利潤)」——削除。
- 4) ここまでの部分は、原文では「Spaltung d. Profits in Zins u. Unternehmungsgewinn. (Insust. od. Comm. Profit).」,すなわち「利子と企業利得とへの利潤の分裂。(産業利潤または商業利潤)。」であるように見えるが、「(産業利潤または商業利潤)」は、明らかに直前の「企業利得」の説明である。
- 5) 「利子生み資本」Das Zinstragende Capital→Das zinstragende Kapital  
草稿ではこの第5章の全体を通じて、Zinstragendの最初のZは、しばしば、大文字になっているが、エンゲルス版ではこれらはすべて小文字になっている。以下、この変更はいちいち注記しない。

1)<sup>1)</sup> 一般的利潤率およびそれに対応する平均利潤<sup>2)</sup>を最初に考察したときには<sup>3)</sup>(この部の第2章<sup>4)</sup>では), 平均利潤率はまだ, その完成した状態ではわれわれの前に現われていなかった。というのは、《均等化は》<sup>5)</sup>さまざまな部面に投下された生産資本<sup>6)</sup>の均等化として現われていただけだったからである。この点は前章<sup>7)</sup>で補足されたのであって、そこでは均等化<sup>8)</sup>への商業資本 [mercantiles Capital] の参加が(同時に商業利潤についても)<sup>9)</sup>論究された。そこで一般的利潤率または<sup>10)</sup>平均利潤は、前よりも狭い限界のなかで現われることになった。これ以降の展開では、われわれが一般的利潤率または平均利潤と言う場合には、それはこのあとのほうの意味で言っているのだと、つまり《ただ》平均率の完成した状態《だけ》について言っているのだと解されなければならない<sup>11)</sup>。このような言葉の使い方では<sup>12)</sup>, 平均率は産業資本にとっても商業資本にとっても同じなのだから、この平均利潤だけが問題となるかぎりでは、産業利潤と商業利潤<sup>13)</sup>とを区別することももはや必要ない。資本は、生産部面のなかで

22 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

《産業的に》投下されようと、流通部面のなかで<sup>14)</sup>《商業的に》投下されようと、<sup>15)</sup>同じ年間平均利潤をもたらすのである。

- 1) 「1)」(これは、この第5章の第1の部分であることを示す表題番号であろう。)→「第21章 利子生み資本」(表題)
- 2) 「およびそれに対応する平均利潤」→「または平均利潤率」
- 3) 「ときには」in→bei
- 4) 「第2章 [|| ch.]」→「第2篇」
- 5) 挿入——「まだ」
- 6) 「生産資本 [productive Capitalien]」→「産業資本」なお、マルクスの草稿では、資本の循環形態としての「生産資本」も産業資本にあたる「生産資本」も、ともに productives Capital である。本稿では、どちらの場合にも「生産資本」と訳す。
- 7) 「前章」→「前篇」
- 8) 「均等化」→「この均等化」
- 9) 「(同時に商業利潤についても)」——削除。
- 10) 「または」→「および」
- 11) 「解されなければならない [it is to be understood]」→「念頭に置いていなければならない [im Auge zu halten sein]」
- 12) 「このような言葉の使い方では [in dieser Fassung]」(マルクスは、はじめ「ここでは [hier]」と書いたのち、それを消している)→「いまでは [nunmehr]」
- 13) 「産業利潤と商業利潤」→「商業利潤と産業利潤」
- 14) 「のなかで」innerhalb→in
- 15) 挿入——「その大きさに比例して [pro rata seiner Grösse]」

貨幣<sup>1)</sup>すなわち<sup>2)</sup>ここでは貨幣はある価値額の自立的表現と見なされているのであって、この価値額が貨幣のかたちで存在するか商品のかたちで存在するかにはかかわりない<sup>1)</sup>は資本主義的生産様式<sup>3)</sup>の基礎の上では資本に転化させられることができるのであり、そしてこの転化によって、貨幣はある与えられた価値から、自分《自身》を増殖する《、増加させる》価値になり<sup>4)</sup>、<sup>5)</sup>利潤を生産する、すなわち資本家に、労働者から一定分量の不払労働、剰余価値、そして剰余生産物<sup>6)</sup>を引き出して取得する能力を与えるので、<sup>7)</sup>貨幣は、それが貨幣としてもっている使用価値のほかに、

一つの追加的使用価値，すなわち資本として機能するという使用価値を受け取る。<sup>8)</sup> このような，可能的資本としての，利潤を生産するための手段としての属性において，貨幣は商品に，といっても一つの独特な種類の商品 [Waare sui generis] になる。または，同じことに帰着するが，資本としての資本が商品になるのである。<sup>9)</sup>

- 1) 「(」および「)」→「—」
- 2) 「すなわち [d. h.]」——削除。
- 3) 「生産様式」→「生産」
- 4) 「自分自身を増殖する，増加させる価値になる」 sich selbst verwerthender, sich vermehrender Werth werden→zu einem sich selbst verwertenden, sich vermehrenden Wert werden
- 5) 「なり，」→「なる。それは」
- 6) 「剰余価値，そして剰余生産物」→「剰余生産物，そして剰余価値」なお，草稿ではしばしば「剰余価値」は Surpluswerth, 「剰余生産物」は Surplus-produce と書かれているが，エンゲルスはこれらをすべて Mehrwert および Mehrprodukt に変えている。以下，この変更はいちいち注記しない。
- 7) 「ので [da],」→「。だから [damit]」
- 8) 草稿では，ここに「T」の字に似た挿入記号がある。これは，すぐあとのパラグラフの冒頭にある同様の記号に関連するものと思われる。エンゲルスは，そのパラグラフをここに挿入した。

[286下|〔原注〕a) 経済人たち [Oekonomen] が事柄をこのように考えている二三の箇所をここに引用すべきである。<sup>1)</sup> 第1194号<sup>2)</sup> 「あなたがた (イングランド銀行) は，資本という商品を取り扱う非常に大きな商人 [very large dealers in the commodity of capital] ですね？」(『銀行法に関する報告』, 1857年)<sup>3)</sup> [原注 a) の終り]

- 1) 「引用すべきである [Es sind...zu zitiren]」→「引用すべきであろう [Es wären...zu zitieren]」
- 2) 「第1194号」——削除。
- 3) 「『銀行法に関する報告』, 1857年)」→「『銀行法に関する報告』(下院, 1857年)のための証人尋問でこう尋ねられているのはこの銀行の1理事である。」



24 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

/286上/<sup>1)</sup>貨幣の使用価値とは、ここではまさに、それが資本に転化して生産する利潤にある。

- 1) ここに、「T」の字に似た挿入記号がある。これは、すぐまえのパラグラフの冒頭にある同様の記号に関連するものと思われる。エンゲルスはこのパラグラフをそこに挿入した。

年間平均利潤率が20%であると仮定しよう。その場合には、100ポンド・スターリングの価値額<sup>1)</sup>を平均的条件の下で、また平均程度 [Durchschnittsmass] の知能と合目的性<sup>2)</sup>とをもって資本として支出<sup>3)</sup>すれば、それは20ポンドの利潤をあげるであろう。つまり、100ポンドを自分の手中で自由に使うことができる<sup>4)</sup>人は、100ポンドを120ポンドにする力、すなわち20ポンドの利潤を生産する力を自分の手中にもつわけである。彼は自分の手中に100ポンド・スターリングの可能的資本をもっている。この人がこの100ポンドを、現実<sup>5)</sup>にそれを資本として充用する別の人の手に《1年間》任せておかなければ、前者は後者に、20ポンド《の利潤》を生産する力、つまり自分にとって費用もかからなければ自分が等価を支払いもしない剰余価値を生産する力を与えることになる。後者が《100ポンドの所有者に<sup>6)</sup>》年末に5ポンドほどを支払うとすれば、すなわち生産された利潤の1部分を支払うとすれば、これによって彼はこの100ポンドがもっている使用価値に、つまり資本として機能するという、だからまた《20ポンドの》利潤を生産するという、その使用価値に<sup>6)</sup>、支払うわけである。利潤のうちの彼が前者に支払う部分は利子と呼ばれる。だから利子というのは、機能資本<sup>7)</sup>が自分のふところに入れなくて資本の所有者に||287上|支払ってしまわなければならない、利潤のうちの一部分を表わす特殊な名称、特殊な項目にはかならないのである。

- 1) 「価値額」→「価値の機械」
- 2) 「合目的性」→「合目的的活動」
- 3) 「支出する [verausgaben]」→「使用する [verwenden]」
- 4) 「自分の手中で自由に使うことができる [in seiner Hand disponibel ha-

ben]」→「自由に使うことができる [zur Verfügung haben]」

- 5) 「100ポンドの所有者に」——マルクスは、はじめ「彼に」と書いたのち、それを「100ポンドの所持者 [Besitzer] に」と変更し、それをさらにこのように変更している。
- 6) 「この100ポンドがもっている使用価値に、つまり資本として機能するという、だからまた20ポンドの利潤を生産するという、その使用価値に」→「この100ポンドの使用価値に、つまりその資本機能、20ポンドの利潤を生産するという機能の使用価値に」なお、「機能」という語については、次注を見られたい。
- 7) 「機能資本」——functionirendes Capital→fungierendes Kapital マルクスは、「機能 [Funktion]」(名詞)に対応する「機能する」という動詞としてはつねに functioniren を使っているが、エンゲルスはこの動詞を一貫して fungieren に変えている。以下、この原則によって行なわれている変更はいちいち注記しない。

100ポンドをもっているということがその所有者に、利子を、すなわち<sup>1)</sup>自分の資本によって生産された利潤のいくらかの部分を、代償として要求する<sup>2)</sup>力を与えるのだということは、明らかである。もし彼が100ポンドを他の人に渡さなければ、この人は20ポンドの<sup>3)</sup>利潤を生産することはできないであろうし、そもそも<sup>4)</sup>資本家として機能することはできないであろう。a)/

- 1) 「すなわち [oder]」——削除。
- 2) 「代償として要求する [abverlangen]」→「引き寄せる [an sich ziehen]」
- 3) 「20ポンドの」——削除。
- 4) 挿入——「この100ポンドにかんしては」

[287下| [原注] a) 「利潤をあげるという意図をもって貨幣を借りる人は利潤の1部分を貸し手に与えなければならない、ということは自然的公正の自明な1原理である。」(J.W.ギルバート『銀行業の歴史と原理』、ロンドン、1834年、163ページ。)[原注a)の終り]

/287上/<sup>1)</sup>ここで「自然的公正」(注a)を見よ)<sup>2)</sup>を云々することは無意味である。生産当事者たちのあいだで行なわれる取引の公正 [justice der

transactions] は、これらの取引が生産関係から自然的帰結として生じるということにもとづいている。法律的諸形態では、これらの経済的取引は<sup>3)</sup> 意志行為として、彼らの共通の意志の発現——<sup>4)</sup> また個々の当事者にたいして国家によって強制される契約——<sup>4)</sup> として現われるのであるが、このような法律的諸形態は、たんなる形態である以上、この内容そのものを規定することはできない。このような形態はただこの内容を表現するだけである。この内容は、それが生産様式に対応し、<sup>5)</sup> 適合している<sup>6)</sup> ときには公正なのである。生産様式と矛盾しているときには、それは不公正である。たとえば<sup>7)</sup>、奴隷制は資本主義的生産様式の基礎の上では不公正である。商品の質についての<sup>8)</sup> ごまかしもそうである。

- 1) 挿入——「ギルバートとともに(注を見よ)」
- 2) 「(注 a を見よ)」——削除。
- 3) 挿入——「関与者たちの [der Beteiligten]」
- 4) 「——」——削除。
- 5) 挿入——「それに」。
- 6) 「対応し、適合している」——この部分は草稿では、「対応している [entspricht]」のうえに「適合している [adäquat ist]」と書かれているものである。
- 7) 「たとえば」——削除。
- 8) 「質についての」——über die Qualität→auf die Qualität

100 ポンドが20ポンドの利潤を生産するのは、それが産業資本<sup>1)</sup>としてであろうと商業資本としてであろうと、とにかく資本として機能するということによってである。しかし、資本としてのこの機能に欠くことのできない条件は、それが資本として支出されるということ、つまり、貨幣が生産手段の購入(産業資本の場合)かまたは商品の購入(商業資本の場合)に支出される<sup>2)</sup>ということである。だが、貨幣を支出する<sup>3)</sup>ためには、貨幣がそこになければならぬ。もしも100ポンドの所有者《A》がそれを自分の個人的消費のために支出するとか蓄蔵貨幣として手もとにおくとかすれば、その100ポンドは機能資本家Bによって資本として支出されることはできないであろう。Bは、自分の資本を支出するのではなく、Aの資

本を支出するのである。だが、彼はAの意志にかかわりなしにAの資本を支出することはできない。だから、はじめに [in the first instance] 100ポンドを資本として支出するのは、実際はAなのである。といっても、彼の資本家としての全機能はこのように100ポンドを資本として支出することだけに限られているのではあるが。(41この100ポンドに関する限りでは、)41 Bが資本家として機能するのは、ただ、AがBに100ポンドを任せ、したがってまたそれを資本として支出するからにはかならないのである。

- 1) 「産業資本」——マルクスは、はじめ「生産 [productives] 資本」と書いたのち、それを「産業 [industrielles] 資本」に変更した。
- 2) 「支出される [verausgabt]」→「投下される [ausgelegt]」
- 3) 「貨幣を支出する」→「支出される」
- 4) 「(」および「)」——削除。

まず、利子生み資本の特有な流通を考察しよう。次いで第2には、それが商品として売られる独特な仕方、すなわち売られる<sup>1)</sup>代わりに貸し付けられる、という独特な仕方に言及し<sup>2)</sup> なければならない。

- 1) 「売られる」→「譲られてしまう [ein für allemal abgetreten wird]」
- 2) 「言及する [erwägen]」→「研究する」

《第1。<sup>1)</sup>》出発点は、AがBに前貸しする貨幣である。〔<sup>2)</sup> この前貸は、担保つきでも、無担保でも行なわれうる。とはいえ、担保つきという形態は、商品を担保として、あるいは手形等々<sup>3)</sup> のような債務証書を担保として行なわれる前貸の場合を<sup>4)</sup> 別とすれば、より古風なもの<sup>5)</sup> である。これらの特殊な形態はここではわれわれに関係がない。われわれが<sup>6)</sup> 取り扱うのは普通の形態の利子生み資本である。〕<sup>2)7)</sup> Bの手で貨幣は現実には資本に転化させられ、運動  $G\_W\_G'$ <sup>8)</sup> をすませてから、 $G'$  として、 $G+\Delta G$  として、《直接に<sup>9)</sup>》帰ってくる。この  $\Delta G$  は利子を表わす。(それがかなり長いあいだBの手に留まっていて、Bは一定の期日ごとに利子を支払うだけであり、資本はかなり長い期間を経たのちにはじめて、最後に支払われるべき利子とともに還流してくる [retourniren]、ということもありうる。

28 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

ここでは、簡単にするために、このような場合もしばらく問題にしないことにする。)<sup>10)</sup>

- 1) 「第1。」——削除。
- 2) 「〔 〕および〔 〕」——削除。なお草稿では、「 〕」は「 ) 」となっている。
- 3) 「手形等々」→「手形, 株式, 等々」
- 4) 「前貸の場合を」→「前貸を」
- 5) 「より古風なもの」→「より古風な形態」
- 6) 挿入——「ここで」
- 7) エンゲルス版はここで改行している。
- 8) GおよびWのあいだの「\_」は、エンゲルス版では「—」となっている。草稿ではこの線は、各文字の並び線に、すなわち大文字のGおよびWの下端の部分に揃うように書かれている。いちいち注記しないが、以下すべて同様である。
- 9) 「直接に〔direct〕」——削除。
- 10) この丸括弧で囲まれた部分は、エンゲルス版では、括弧のない次のような文に書き直された。——「ここでは、簡単にするために、資本がかなり長いあいだBの手に留っていて期日ごとに利子が支払われるという場合はしばらく問題にしないことにする。」

つまりこの運動は  $G\_G\_W\_G'\_G'$  である。<sup>1)</sup>

- 1) 原文は「D. Bewegung ist also  $G\_G\_W\_G'\_G'$ 。」である。エンゲルス版では、also のあとに「:」が挿入され、ここで改行された。そこでこうなった。

「つまりこの運動はこうである。——

$G-G-W-G'-G'$ 。」

なお、草稿では「 $G\_G\_W\_G'\_G'$ 」の最初の「G」のうえにラテン書体の「W」のようなしるしがつけられており、さらに、中間の「 $G\_W\_G'$ 」の上部にスラー状のもの(∪)が書かれている。

ここで二重に現われているのは、1) 資本としての貨幣の支出であり、2) 実現された資本としての、 $G'$  または  $G+\Delta G$  としての、その還流〔Return〕である。

商業資本〔mercantiles Capital〕の運動  $G\_W\_G'$ <sup>1)</sup> では《同じ》商品が二度、または(最初の売り手と最後の買い手とのあいだに何人もの商

人〔がはいる〕場合には)<sup>2)</sup> 何度も、持ち手を取り替える。しかし、同じ商品のこのような場所変換は、そのそれぞれがその商品の1つの変態、その購買または販売を示しているのであって、その商品の最終的な販売までに<sup>3)</sup> この過程が何度繰り返されようとも、そうなのである。

- 1) 「W」のうえに、ラテン書体の「w」のようなしるしがつけられている。
- 2) 「(最初の売り手と最後の買い手とのあいだに何人も商人〔がはいる〕場合には)」→「商人が商人に売る場合には」
- 3) 「その商品の最終的な販売までに」→「その商品が最終的に消費に落ちるまでに」

他方、W\_G\_W のなかには同じ貨幣の2度の場所変換(持手変換)<sup>1)</sup> がある<sup>2)</sup> が、しかし、それは商品の完全な変態を示しているのであって、商品はまず|288上|貨幣に転化され、次に貨幣からふたたび商品<sup>3)</sup> に転化されるのである。

- 1) 「場所変換(持手変換)」——草稿では、「場所」という語の上に「(持手)」と書かれている。
- 2) 「ある〔sein〕」→「行なわれる〔stattfinden〕」
- 3) 「商品」→「別の1商品」

これに反して、利子生み資本の場合にはGによる<sup>1)</sup> 第1の場所変換は、けっして資本の変態の契機あるいは資本の再生産過程の契機ではない<sup>2)</sup>。Gは第2の支出ではじめてこのような契機になる。すなわち、このGで商品取引等々<sup>3)</sup> を営むかまたはそれを生産的資本に転化させる機能資本家の手のなかではじめてそうなるのである。ここでGの第1の場所変換が表わしているものは、Gの移転<sup>4)</sup>、AからBへのGの移転または引渡し以外のなものでもない<sup>(5)</sup> この移転は、ある法律上の形式と留保とのもとで行なわれる<sup>(6)</sup> ののである<sup>(6)</sup>。

- 1) 「Gによる〔durch G〕」→「Gの〔von G〕」
- 2) 「けっして資本の変態の契機あるいは資本の再生産過程の契機ではない」→「けっして商品変態の契機でもなければ資本の再生産過程の契機でもない」

30 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

- 3) 「商品取引等々 [Waarenhandel etc.]」→「商業 [Handel]」
- 4) 「Gの移転 [sein transfer]」——削除。
- 5) 「( ) および ( )」——削除。
- 6) 「行なわれる」→「行なわれるのが常である」

このような、資本としての貨幣の二重の支出——その第1のものはAからBへのたんなる移転 [transfer] である——には、その二重の還流 [Return] が対応する。それは  $G'$  または  $G + \Delta G$  として運動から機能資本家に還流する [retourniren]。次にBはふたたびそれをAに transfer する、移転する<sup>1)</sup>。この場合、 $\Delta G$  は利潤<sup>2)</sup> に等しいのではなく、ただ利潤の1部分、利子でしかない。Bに貨幣が還流する [retourniren] のは、ただ、Bが支出したものとして、機能資本として、とはいえAの所有物として、還流するだけである。だから、その還流 [Return] が完全になるためには、BはそれをふたたびAに移転し [transfer] しなければならない。しかし、Bは、資本額のほかに、自分がこの資本額であげた利潤の1部分を利子という名目でAに引き渡さなければならない。というのは、AがBに貨幣を渡したのは、ただ、資本として、すなわち運動のなかで自分を維持するだけでなく自分の所有者のために或る新価値<sup>3)</sup> を創造する価値として、渡しただけだからである。<sup>++)</sup>/

- 1) 「transfer する、移転する [übertragen]」→「移転する」
- 2) 「利潤」→「全利潤」
- 3) 「新価値」→「剰余価値」

/288上/<sup>++1)</sup> この貨幣がBの手に留まっているのは、ただそれが機能資本であるあいだだけである。そして、その還流 [Return] (<sup>3)</sup>約束の期限がきつてからの<sup>2)</sup> とともに、それは資本として機能しなくなる、機能資本であることをやめる<sup>3)</sup>。しかし、機能していない資本<sup>4)</sup> として、それはふたたびBの手から<sup>5)</sup> Aの手に、すなわち自分の資本をBに手放しているあいだもずっと<sup>6)</sup> その法律上の所有者でなくなるAの手に、移転 [transfer] されなければならないのである。<sup>7)</sup> [<sup>++)</sup>による追記部分の終り]/

- 1) この「++」という記号で上の箇所への連絡が示されている部分は、以下の3つのパラグラフのあとに書かれている。
- 2) 「(」および「)」→「——」
- 3) 「機能資本であることをやめる」——削除。
- 4) 「機能していない資本 [nichtfunctionirendes Capital]」→「もはや機能していない資本 [nicht länger fungierendes Kapital]」
- 5) 「Bの手から」——削除。
- 6) 「自分の資本をBに手放しているあいだもずっと [während d. ganzen Entäußerung seines Kapitals an B]」——削除。
- 7) ここに「)」があるが、不要であろう。「++」によって追加された部分の末尾を示すために書かれたものかもしれない。

/288上/ この商品に、すなわち商品としての資本に特有な、販売という形態に代わる貸付という形態<sup>1)</sup> ただし〔この形態は〕他の諸取引でも見られる<sup>1)</sup> は、資本がここでは商品として現われるという、または資本としての貨幣が商品になるという規定そのもの<sup>2)</sup> から、出てくるのである。

- 1) 「(」および「)」——削除。
- 2) 「そのもの」——削除。

ここでは次のような区別をしなければならない。

すでに見たように<sup>1)</sup>、資本は流通過程では商品資本および貨幣資本として機能する。<sup>2)</sup>

- 1) 挿入——「(第2部第1章), またここで簡単に思いだすように」
- 2) エンゲルス版では改行していない。このパラグラフのあとに、さきに見た「++」をつけて追記された部分が書かれている。次のパラグラフ(1行)は内容的には、エンゲルス版でそうになっているようにこのパラグラフの一部をなすものと見るべきであろう。

/288上/ しかし、この2つの形態では、資本は資本としては商品にならない。

生産資本が商品資本に転化したならば、それは、商品として売られるために、市場に投じられなければならない<sup>1)</sup>。ここではそれは単純に商品として機能する。ここでは資本家はただ商品の売り手として現われるのであ



り、それは買い手が商品の買い手として現われるのと同様である。商品としては、生産物は流通過程でその販売によってその価値を実現しなければならず、貨幣としてのその転化した姿態をとらなければならない。したがってまた、この商品が消費者によって生活手段として買われるか、それとも資本家によって生産手段として、資本成分として、買われるかということも、まったくどうでもよい [vollständig indifferent] ことである。現実の機能では、<sup>2)</sup> 流通行為では、商品資本はただ商品として機能するだけで、資本として機能するのではない。それが単純な商品とは違う商品資本<sup>3)</sup>であるのは、1) それがすでに剰余価値をはらんでおり、したがってその価値の実現が同時に剰余価値の実現だからである。といっても、このことは、商品としての、一定の価格をもつ生産物としての、その単純な存在を少しも変えるものではない。2) このような、商品としての商品資本の機能は、資本としての商品資本の再生産過程の1契機であり、したがってまた、商品としての商品資本の運動は、過程の全体に連関させるならば<sup>4)</sup>、同時にまた、資本としての商品資本の運動だからである。しかしそうであるのは<sup>5)</sup>、売るという行為または商品の変態<sup>6)</sup> そのものによってではなく、ただ、商品としての商品資本の運命または運動と、資本としての商品資本の総運動との<sup>7)</sup> 関連によってのみである。

- 1) 「商品として売られるために、市場に投じられなければならない」→「市場に投じられ、商品として売られなければならない」
- 2) 「現実の機能では、」——削除。
- 3) 「資本」——エンゲルス版では強調している。
- 4) 「過程の全体に連関させるならば [auf d. Ganze d. Prozesses bezogen]」→「商品資本の過程の部分運動でしかないのだから」
- 5) 「しかしそうであるのは [aber]」→「しかし、この運動がこういうものになるのは」
- 6) 「または商品の変態」——削除。
- 7) 「商品としての商品資本の運命または運動と、資本としての商品資本の総運動との」→「この行為と、この一定の価値額が資本として行なう総運動との」  
同様に、貨幣資本としても、資本は事実上ただ単純に貨幣として、すな

わち商品（生産手段<sup>1)</sup>）の買い手<sup>2)</sup>として、作用するだけである。この貨幣がここでは同時に貨幣資本であり、すなわち<sup>3)</sup>資本の1形態であるということは、買うという行為すなわち資本がここで貨幣として行なうそれの<sup>4)</sup>現実の機能から出てくるのではない。それは、この行為と資本の総運動との関連から、もっと詳しく言えば、<sup>5)</sup>それが貨幣として行なうこれらの購買行為<sup>6)</sup>が資本主義的生産過程を導入するということによって、出てくるのである。]

- 1) 「生産手段」→「生産諸要素」
- 2) 「買い手」→「購買手段」
- 3) 「すなわち [oder]」——削除。
- 4) 「その [sein]」——削除。
- 5) 「もっと詳しく言えば、」——削除。
- 6) 「これらの購買行為」(複数) →「この購買行為」(単数)

[289上]しかし、それらが現実に機能し、現実に過程のなかでそれらの役割を演じるかぎりでは、ここでは商品資本はただ商品として働き、貨幣資本はただ貨幣として働くだけである。変態の諸契機をそれ自身として見れば、どの契機でも<sup>1)</sup>資本家は、たとえその商品が彼にとっては資本を表わすにしても、商品を資本<sup>2)</sup>として買い手に売るのではなく、あるいはまた貨幣を資本として売り手に譲渡するのでもない。どちらの場合にも、彼は商品を単純に商品として譲渡するのであり、また貨幣を単純に購買手段として支出する、すなわちそれで商品を買う<sup>3)</sup>のである。

- 1) 「変態の諸契機をそれ自身として見れば、どの契機でも [in keinem d. Momente d. Metamorphose, für sich betrachtet]」→「変態の個々の契機をそれ自体として見れば、どの個々の契機でも」
- 2) 「資本」——エンゲルス版でも強調している。
- 3) 「購買手段として支出する、すなわちそれで商品を買う」→「貨幣として、商品の購買手段として譲渡する」

資本が流通過程で資本として現われるのは、ただ、全過程<sup>1)</sup>の関連のなかだけでのことであり、出発過程<sup>2)</sup>が同時に復帰点として現われる契機、

$G\_G'$  (または、出発点としての商品から出発される場合には、 $W\_W'$ )<sup>9)</sup>のなかだけでのことである。(1) 生産過程では、資本が資本として現われるのは資本家への労働者の従属と 剰余価値の生産とによるのである。)だが、ここでは<sup>9)</sup>、媒介は消え去っている。そこにあるものは、 $G'$  または  $G+\Delta G$  であり (この  $\Delta G$  だけふえた価値額が貨幣の形態で存在しようと、商品の形態で存在しようと、生産手段、固定資本等々<sup>6)</sup>の形態で存在しようと)、投下された最初の<sup>7)</sup> 貨幣額・プラス・それを 越える 超過分すなわち実現された剰余価値、に等しい貨幣額である。だが、まさにこの復帰点では、すなわち資本が《実現された》資本として、増殖する<sup>8)</sup> 価値として存在するこの復帰点では、この形態では、——この点が、想像的であろうと現実にてであろうと、休止点として固定されるかぎりでは——資本はけっして流通にははいらぬのであり、むしろ流通から引き上げられたものとして、全過程の結果として、現われるのである。それがふたたび支出されるときには、それはけっして資本として<sup>9)</sup> 第三者に譲渡されるのではなく、単純な商品として第三者に売られるか、または単純な貨幣として商品に転化される<sup>10)</sup>。資本は、その流通过程ではけっして資本としては譲渡され<sup>11)</sup>ないで、ただ商品または貨幣として譲渡され<sup>11)</sup>のだけであって、これがここでは資本の唯一の、他者にとっての<sup>12)</sup>定在なのである。商品や貨幣がここで資本であるのは、一方<sup>13)</sup>が貨幣に転化し他方<sup>14)</sup>が商品に転化するかぎりでのことではなく、買い手または売り手にたいする商品や貨幣の<sup>15)</sup>連関のなかでのことではなく、ただ、資本家自身にたいする(主観的に見れば)、または総過程<sup>16)</sup>の諸契機としての(客観的に見れば)、商品や貨幣の観念的な連関のなかだけでのことである。現実の運動のなかで資本が資本として存在するのは、流通过程でのことではなく、ただ生産過程<sup>17)</sup>のなかだけでのことである。

1) 「過程 [Prozess]」→「経過 [Verlauf]」

2) 「出発過程 [Ausgangsprozess]」→「出発点 [Ausgangspunkt]」これはもともとマルクスの誤記だったのであろう。

- 3) 「(または、出発点としての商品から出発される場合には、 $W\_W'$ )」→「または、 $W-W'$ 」
- 4) 挿入——「他方で〔während〕」
- 5) 「ここでは」→「この復帰の契機では」
- 6) 「生産手段、固定資本等々」→「生産諸要素」
- 7) 「投下された最初の」→「最初に前貸された」
- 8) 「増殖する〔verwertend〕」→「増殖された〔verwertet〕」
- 9) 「資本として」——エンゲルス版では強調されている。
- 10) 「単純な貨幣として商品に転化される」→「単純な貨幣として商品と引き換えに第三者に渡される〔hingegen〕」
- 11) 「譲渡され」→「現われ」
- 12) 「他者にとっての」——エンゲルス版でも強調されている。
- 13) 「一方」→「商品」
- 14) 「他方」→「貨幣」
- 15) 挿入——「現実的〔wirklich〕」
- 16) 「総過程」→「再生産過程」
- 17) 挿入——「労働力の搾取過程」

ところが、利子生み資本ではそうではない。そして、まさにこのことこそが利子生み資本の独自の性格をなしているのである。<sup>1)</sup>

1) エンゲルス版では改行していない。

自分の貨幣を利子生み資本として増殖しようとする貨幣所持者は、それを第三者に譲渡し、それを資本としての<sup>1)</sup>商品にする。それは、それを譲渡する彼にとっての資本としてだけでなく、資本として<sup>2)</sup>、剰余価値、利潤を創造するという使用価値をもつ価値として、第三者に引き渡されるのである。つまり、それが彼に引き渡されるのは、資本として、すなわち、<sup>3)</sup>運動のなかで自分を維持し<sup>4)</sup>、機能し終えたのちにその最初の引渡人の手に、ここでは貨幣所持者の手に帰ってくる価値としてである。つまり、ただしばらくのあいだだけ彼の手から離れ、<sup>5)</sup>その所有者の占有から機能資本家の占有に移るのであって、支払われてしまうのでも売られるのでもなく、ただ貸し付けられる、ただ貸されるだけ<sup>6)</sup>の価値としてである。

すなわち,<sup>7)</sup>一定期間の後にはその出発点に帰ってくる[retourniren]という、また第2には実現された資本として、したがって剰余価値を生産するというその使用価値を実現した資本として、還流する[retourniren]という条件のもとでのみ、その価値は手放[entäussern]される<sup>8)</sup>のである。<sup>a)/</sup>

- 1) 「資本としての」への下線は二重になっている。この部分は、エンゲルス版でも強調されている。
- 2) 「それを譲渡する彼にとっての資本としてだけでなく、資本として」→「自身にとってだけでなく他の人々にとっても資本として、である。それは、それを譲渡する人にとって資本であるだけでなく、はじめから資本として」
- 3) 「つまり、それが彼に引き渡されるのは、資本として、すなわち、」——削除。
- 4) 「維持し [erhalten]」→「維持しつづけ [forterhalten]」
- 5) 挿入——「ただ一時的に」
- 6) 「ただ貸し付けられる、ただ貸されるだけ [nur verliehn, nur geliehn werden]」→「ただ貸し出されるだけ [nur ausgeliehen werden]」
- 7) 挿入——「第一には」
- 8) 「手放す」——マルクスは、はじめ「譲渡する[veräussern]」と書いたのち、それを「手放す[entäussern]」に変更している。

/289下/〔原注〕a) 追記 [Zusatz]<sup>1)</sup>。資本としての商品が貸し付けられるとき、それは<sup>2) 3)</sup> 流動資本<sup>4)</sup>として貸し付けられることも、固定資本<sup>5)</sup>として貸し付けられることもできる。貨幣はどちらの形態でも貸し付けられることができる。固定資本として貸し付けられるのは、たとえば、貨幣が年金<sup>6)</sup>のかたちで返済され、したがって利子といっしょに絶えず資本も少しずつ還流する[retourniren]という場合である。他の<sup>7)</sup>諸商品は、その使用価値の性質上、いつでもただ固定資本としてしか貸し付けられることができない。家屋や<sup>8)</sup>機械などがそれである。しかし、すべての貸し付けられる資本は、その形態がどうであろうと、またその使用価値の性質によって返済がどのように変形されようとも、つねにただ貨幣資本の特殊な1形態でしかない。というのは、ここで貸し付けられるものは、つねにある一定の貨幣額であって、この場合<sup>9)</sup>、利子もまたこの額にたいして計算さ

れるのだからである。もし貸し出されるものが貨幣でも流動資本でもないならば、その返済もまた固定資本が還流する〔retourniren〕ような仕方で行なわれる。貸し手は周期的に利子と、固定資本そのものの消費された〔consumirt〕価値の1部分、つまり周期的な損耗分〔Déchet〕の等価とを返してもら<sup>10)</sup>。そして、<sup>11)</sup> 終わりには、貸し付けられた固定資本の未消費〔unconsumirt〕部分が現物で帰ってくる。もし貸し付けられる資本が流動資本ならば、それはやはり<sup>12)</sup> 流動資本の還流の仕方〔Returnweise〕で貸し手のもとに還流する<sup>13)</sup>。

- 1) エンゲルスは、「a)」で始まる以下5パラグラフのこの「追記」を、そっくり本文に繰り入れた。
- 2) 「資本としての商品が貸し付けられるとき、それは」→「資本として貸し付けられる商品は」
- 3) 挿入——「その性状に応じて」
- 4) 「流動資本」→「固定資本」
- 5) 「固定資本」→「流動資本」
- 6) 「年金〔Annuität〕」→「終身年金〔Leibrente〕」
- 7) 「他の」→「ある種の」
- 8) 挿入——「船舶や」
- 9) 「この場合〔dann〕」——エンゲルス版では denn になっている。denn かもしれない。
- 10) 「返してもら<sup>10)</sup>〔zurückerhalten〕」→「受け取る〔erhalten〕」
- 11) 挿入——「貸付期間の」
- 12) 「やはり」auch→ebenfalls
- 13) 「還流する〔retourniren〕」→「帰ってくる」

<sup>1)</sup> 還流〔Retrun〕の仕方<sup>2)</sup>は、《再》生産<sup>3)</sup>資本の、またその特殊な種類の、現実の循環運動によって規定されている。しかし、貸し付けられる資本にとっては還流〔return〕は返済、repayment<sup>4)</sup>という形態<sup>5)</sup>をとる。なぜならば、その前貸、その手放し〔Entäusserung〕が貸付という形態をもっているからである。

- 1) 挿入——「つまりどの場合にも〔also jedesmal〕」

38 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

- 2) 「仕方」——エンゲルス版では、強調されている。
- 3) 「再生産 [reprod.]」→「再生産される [sich reproduzierend]」
- 4) 「, repayment」——削除。
- 5) 「形態」——エンゲルス版では強調されている。

この項目<sup>1)</sup>でわれわれが取り扱うのはただ本来の貨幣資本だけであって、そのほかの貸付資本の諸形態はこの貨幣資本から派生したものである。

- 1) 「項目 [Abschnitt]」→「章 [Kapitel]」

貸し出された資本は二重に還流する [retourniren]。現実の過程<sup>1)</sup>ではそれは機能資本家の手に還流し<sup>2)</sup>、それからもう一度、貸し手 [lender] すなわち貨幣資本家 [monied capitalist] への移転 [transfer] として、つまり、資本の現実の所有者、その法律上の出発点への返済として、還流<sup>3)</sup>が繰り返される。

- 1) 「現実の過程」→「再生産過程」
- 2) 「還流し [retourniren]」→「帰り」
- 3) 「還流 [Return]」→「復帰」

現実の流通過程では資本はいつでも商品および<sup>1)</sup> 貨幣として現われるのであって、その運動は一連の交換<sup>2)</sup>、売買に帰着する。要するに、流通過程は商品の変態に帰着するのである。ところが、過程<sup>3)</sup>の全体を見れば、そうではない。貨幣から出発して見れば {<sup>4)</sup> 商品から出発しても同じことである。というのは、その場合には商品の価値から出発するのであり、したがってそれら自身をも貨幣の姿で [sub specie] 見るのだからである}<sup>4)</sup>、その場合にはある貨幣額が引き渡されて、ある期間の後にその貨幣額ならびにそれを越えるある超過分、そのある増加分が<sup>5)</sup> 帰ってくる。増大した貨幣額が、最初の価値の補填分・プラス・剰余価値が<sup>6)</sup> 帰ってくる。それは、ある循環<sup>7)</sup> を通り抜けるなかで自分を維持し増殖したのである。ところで、貨幣は、それが資本として貸し付けられるかぎりでは、まさに、このような自分を維持し増殖する貨幣額として貸し出されるのであって、この貨幣額はある期間ののちには利潤<sup>8)</sup> とともに帰ってきて絶えず繰り返

し<sup>9)</sup> 新たに同じ過程を通ることができるのである。それは貨幣として引き渡されるのでもなければ商品として引き渡されるのでもない。つまり、(<sup>10)</sup>貨幣として前貸しされる場合)<sup>10)</sup>商品と交換されるのではなく、(<sup>11)</sup>商品として前貸しされる場合)<sup>11)</sup>貨幣と引き換えに売られるのではない。そうではなくて、それは資本として引き渡されるのである。資本主義的生産過程を全体および統一体として見れば、資本は自分自身にたいする関係として現われ<sup>12)</sup>るのであるが、この、自分自身にたいする関係が、ここでは媒介的中間運動なしに単純に資本の性格として、資本の規定性として、資本に合体されるのである。そして、<sup>13)</sup> それはこのような規定性において譲渡されるのである。〔原注「a) 追記」の終り〕

- 1) 「および」→「または」
- 2) 「交換 [échange]」——削除。
- 3) 「過程」→「再生産過程」
- 4) 「{ }および「」」→「(」
- 5) 「その貨幣額ならびにそれを 越えるある超過分、そのある 増加分が」——削除。
- 6) 「増大した貨幣額が、最初の価値の 補填分 [replacement]・プラス・剰余価値が」→「前貸貨幣額の補填分に剰余価値を加えたものが」
- 7) 「循環 [Turnus]」→「循環運動 [Kreisbewegung]」
- 8) 「利潤」→「追加分」
- 9) 「繰り返し [wieder]」——削除。
- 10) 「(」および「)」——削除。
- 11) 「(」および「)」——削除。
- 12) 挿入——「またこの関係のなかでは資本は貨幣を生む貨幣として現われる」
- 13) 挿入——「資本が貨幣資本として貸し付けられる場合には、」

/289上/<sup>1)</sup> 『信用の無償性。F・バステア氏とブルドン氏との論争』、パリ、1850年<sup>2)</sup>。貸すということは、売ということではないという理由で、ブルドンにとってはよくないものに思われる。利子を取って貸すということは、「自分が売るものの所有をけっして譲り渡すことなしに、同じ対象 [objet] をたえず繰り返して売り、たえず繰り返してその価格を受け



40 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

取るという能力である。」(9ページ。)対象 [object] (貨幣や家などのような)<sup>9)</sup> は、売買の場合とは違って、所有者を取り替えない。ところが、彼が見ていないのは、貨幣が(利子生み資本として)<sup>4)</sup> 手放される場合には、等価はなにも取り返されていないということである。どの売買行為でも、——<sup>5)</sup> およそ交換《過程》が行なわれるかぎりでは——<sup>6)</sup> たしかに [zwar] 対象 [Object] は手放される。いつでも、売られるものの所有は譲り渡される<sup>6)</sup>。しかし、価値は手放されない。売られるときには<sup>7)</sup> 商品は手放されるが、商品の価値は手放されず、この価値は、貨幣というかたちで<sup>8)</sup> または、ここでは貨幣に代わる別の形態でしかないが、債務証書<sup>9)</sup>、支払請求権というかたちで<sup>8)</sup> 還流する<sup>10)</sup>。買われるときには<sup>11)</sup> 貨幣は手放されるが、貨幣の価値は手放されず、この価値は商品というかたちで補填される。再生産過程の全体をつうじて生産的<sup>12)</sup> 資本家は同じ価値を自分の手に保持しているのであって、<sup>13)</sup> ただその価値の ||290上| 形態が変わるだけである。

- 1) 挿入——「貨幣資本の役割についての奇妙な見解は、プルドンのそれである(」
- 2) 挿入——「)」
- 3) 「対象 [object] (貨幣や家などのような)」→「貨幣や家などのような対象 [Gegenstand]」
- 4) 「(利子生み資本として)」→「利子生み資本の形態で」
- 5) 「——」→「, 」
- 6) この1文は、フランス語でプルドンの原文通りに書かれている。
- 7) 「売られるときには」→「販売の場合には」
- 8) 「(」および「)」——削除。
- 9) ここに「または」を挿入。
- 10) 「還流する [retourniren]」→「返される [zurückgegeben werden]」
- 11) 「買われるときには」→「購買のさいには」
- 12) 「生産的」→「産業」
- 13) 挿入——「剰余価値は別として」

交換 [échanges], すなわち諸対象 [object] の交換 [échange] が行な

われるかぎりでは、価値の変化 [change of values] は生じない。同じ資本家はいつでも同じ価値を握っている。しかし、資本家によって剰余価値が生産されるかぎりでは、交換 [échange] は行なわれない。そして<sup>1)</sup> 交換 [échange] が行なわれるときには、剰余価値はすでに商品のなかに含まれている。<sup>2)</sup>

- 1) 「そして」——削除。
- 2) エンゲルス版では改行していない。

そして<sup>1)</sup> 個々の交換行為を見るのではなく 資本の総循環 [Gesamtturnus]  $G\_W\_G'$  を見るならば、絶えず一定の価値額が前貸しされていて、この価値額・プラス・剰余価値または利潤が流通から引き上げられる。<sup>(2)</sup>この過程の媒介は、もちろん、たんなる交換行為では目に見えない。<sup>2)</sup>そして、まさにこのような、資本としての貨幣の過程こそは、貸付資本家<sup>3)</sup>の利子がそれにもとづき、それから発現するものなのである。

- 1) 「そして」——削除。
- 2) 「(」および「)」——削除。
- 3) 「貸付資本家 [Capitalist prêteur]」→「貸付貨幣資本家 [verleihender Geldkapitalist]」

<sup>1)</sup>「じっさい、帽子を売る帽子製造業者は……帽子のかわりにその価値を受け取るのであり、それより多くも少なくも受け取らない。ところが、貸付資本家 [capitaliste prêteur] は……自分の資本をそっくりそのまま取り返すだけではない。彼は、資本よりも多くを、彼が交換に投じるよりも多くを、受け取る。彼は資本のうえに利子を受け取る。」(同前、169ページ。)

- 1) 挿入——「ブルドンは次のように言う。」

ここでは帽子製造業者は、貸付資本家 [capitalists prêteur] に対立する生産資本家を代表する。どのようにして生産資本家は商品とその価値通りに売ることができるのか (生産価格への均等化は<sup>1)</sup> ブルドンによる問題

42 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

の<sup>2)</sup>把握にとってはどうでもよいことである), また, まさにそうすることによって, どうして自分が交換に投じる資本を越えて [en sus du capital qu'il a apporté à l'échange] 利潤を実現する<sup>3)</sup>のか, この秘密を明らかにブルドンは見破ることができなかった。帽子 100 個の生産価格は 115 ポンド・スターリング, またこの生産価格はたまたま帽子の価値に等しい (4) したがって帽子を生産する資本は平均的社会的構成<sup>5)</sup>の資本だ<sup>4)</sup>と仮定しよう。利潤が15%ならば, 帽子製造業者は, 資本をその価値どおりに 115 ポンドで売ることによって, 15ポンドの利潤を実現する。彼にとっては帽子には 100 ポンドしかかかっている。彼が自分の資本で生産したのならば, 彼は《剰余<sup>6)</sup>の》15ポンドを全部ふところに入れてしまう。もし借りた資本で生産したのならば, 彼はたとえば<sup>7)</sup> そのうちから 5 ポンドを利子として渡さなければならない。このことは少しも帽子の価値を変えるものではなく, ただ, この価値に<sup>8)</sup>含まれている剰余価値の, いろいろな人々のあいだの分配を変えるだけである。つまり帽子の価値は利子の支払によっては影響を受けないのだから, すでにまえに解明した次のばか話には根拠がないのである<sup>9)</sup>。「商業では資本の利子が労働者の賃銀に付け加えられて商品の価格を構成するのだから, 労働者が自分の労働の生産物を買戻すことができるということはあるにない。労働して生きて行くということは, 利子の支配のもとでは矛盾を含んだ原理である。」(同前, 105ページ。) a)/

- 1) 挿入——「この場合」
- 2) 「問題の」——削除。
- 3) 「実現する」→「受け取る」
- 4) 「(」および「)」——削除。
- 5) 「平均的社会的構成 [the average social composition]」→「社会的平均構成」
- 6) 「剰余 [Surplus]」→「超過分 [Ueberschuss]」
- 7) 「たとえば」→「もしかすると」
- 8) 挿入——「すでに」

9) 「すでにまえに解明した次のばか話には根拠がないのである」→「ブルドンが次のように言っているのはナンセンスなのである」

[290下|[原注] a) それだから、<sup>1)</sup>「家」や「貨幣」などは、「資本」として貸し付けられるのではなく、「商品」として「原価で」(《同前》、94ページ)譲渡されるのだということになる。ルターはブルドンよりはいくらか高みに立っていた。彼は、利潤をあげることが貸すとか売る<sup>2)</sup>とかいう形態によるものではないということ、すでに知っていた。「購買からも高利は得られる。しかし今このことまでも一口に片付けるわけにはゆかない。まず一方を、貸付による高利を、論じなければならない。これを防止してから(最後の審判の日の後に) 買う場合の高利<sup>3)</sup>にも訓戒を加えることにしよう。」(M・ルター『牧師諸氏へ、高利に反対して、云々、ヴィッテンベルク、1540年。) [原注 a) の終り]

- 1) 挿入——「もしブルドンの言うようだとすれば、」
- 2) 「売る」→「買う」
- 3) 「買う場合の高利」——エンゲルス版でも強調されている。

/290上/ どんなにブルドンが資本一般の運動<sup>1)</sup>を理解しなかったかは、彼が資本一般の運動を利子生み資本に特有な運動として述べている次の文章に現われている。

- 1) 「資本一般 [Capital überhaupt] の運動」→「資本の本性」

「利子の蓄積によって、貨幣資本は交換が行なわれるごとにたえずその源泉に帰るのだから、たえず同じ手によって行なわれる貸付の繰り返しはつねに同じ人に利益をもたらすということになる。」(154ページ)

それでは、利子生み資本の特有の運動のなかでブルドンを当惑させている [puzzle] ものは、なんなのか?<sup>1)</sup>

- 1) エンゲルス版では改行していない。

それは、売る [vendre]<sup>1)</sup>、価格 [prix]、対象を譲渡する [céder des objekts]、という範疇であり、また、ここでは剰余価値が現われている外

面的で<sup>2)</sup> 無媒介な形態である。要するに [in fact], ここでは資本としての資本が商品になってしまっているという現象, それゆえ, 売ること [vendre] が貸すことに転化し, 価格 [prix] が剰余価値の分け前に転化してしまっているという現象である。

- 1) 「売る [vendre]」→「買う [Kaufen]」
- 2) 「外面的で」——削除。

資本が自分の出発点に戻るということは, そもそも, 資本がその総過程<sup>1)</sup> のなかで行なう特徴的な運動である。だから<sup>2)</sup>, このことはけっして利子生み資本<sup>3)</sup> を特徴づけるものではない。利子生み資本を特徴づけるものは, この復帰の, 媒介<sup>4)</sup> から分離された, 外面的な形態である。<sup>5)</sup>

- 1) 「総過程」→「総循環」
- 2) 「だから [also]」——削除。
- 3) 挿入——「だけ」
- 4) 「媒介」→「媒介的循環」
- 5) エンゲルス版では改行していない。

貸付資本家 [Capitalist prêteur] は, 等価を受け取ることなしに自分の資本を手放し, それを生産資本家<sup>1)</sup> に移転する。資本を手放すことは, けっして資本の現実の流通過程<sup>2)</sup> の行為ではなく, ただ生産資本家の側での資本の流通<sup>3)</sup> を準備するだけである。このような, 貨幣の第1の場所変換は, 変態のどんな行為も, 購買も販売も, 表わしてはいない。所有は譲り渡されはしない [D. propriété n'est pas cédée]。なぜならば, 交換過程も生じない<sup>4)</sup> し, 等価も受け取られ<sup>5)</sup> ないからである。||291| 貨幣が生産資本家<sup>6)</sup> の手から貸付資本家 [capit. prêteur] の手に帰るということは, ただ, 資本を手放すという《第1の》行為を補足するだけである。資本は, 貨幣として<sup>7)</sup> 前貸しされて,<sup>8)</sup> ふたたび貨幣形態で生産資本家<sup>9)</sup> の手に帰ってくる。しかし, 資本は, 引き渡されるときに彼のものではなかったのだから, 帰ってくるときにも彼のものではない<sup>10)</sup>。(11)再生産過程も<sup>12)</sup>, この資本は彼の所有に転化することはできない。)<sup>11)</sup>だから, 彼は

それを貸し手〔Ausleiher〕<sup>13)</sup>に返さなければならない。資本を貸し手の手から借り手〔Leiher〕の手に移転する第1の引き渡し<sup>14)</sup>は、1つの法律上の取引であるが、この取引は資本の現実の流過程および生産過程<sup>15)</sup>とはなんの関係もなく、ただそれを準備するだけである。復帰した<sup>16)</sup>資本をふたたび借り手〔Leiher〕の手から貸し手<sup>17)</sup>の手に返済する<sup>18)</sup>復帰<sup>19)</sup>は、第2の法律取引であり、第1の取引の補足〔complement〕である。一方は現実の過程を準備し、他方は現実の過程のあとの補足的な行為である。だから、貸付資本の出発点—手放し、復帰点—返済<sup>20)</sup>は、任意な、法律取引によって媒介される運動として現われるのであって、これらの運動は資本の現実の運動の前後に行なわれるもので、この現実の運動自身とはなんの関係もないものである。というのは<sup>21)</sup>、資本がはじめから生産資本家<sup>22)</sup>のものであり、したがって彼の所有として彼の手に還流する〔retour-niren〕だけであつたとしても、それは資本の現実の運動にとってはどうでもよいことであろうからである<sup>23)</sup>。

- 1) 「生産資本家〔capitalist productif〕」→「産業資本家」
- 2) 「流過程」→「循環過程」
- 3) 「生産資本家の側での資本の流通」→「産業資本家によって実行されるべきこの循環」
- 4) 「交換過程も生じない」→「交換も行なわれない」
- 5) 「受け取る」erhalten→empfangen
- 6) 「生産資本家〔capit. prod.〕」→「産業資本家」
- 7) 「貨幣として」→「貨幣形態で」
- 8) 挿入——「循環過程を経て」
- 9) 「生産資本家〔capitalist productif〕」→「産業資本家」
- 10) 「ではない」→「ではありえない」
- 11) 「( ) および 「 」 」——削除。
- 12) 「も」→「を通過しても」
- 13) 「貸し手〔Ausleiher〕」——はじめ Leiher と書いたが、それに Aus を付け加えて Ausleiher にしている。
- 14) 「引き渡し〔Ausgabe〕」→「支払〔Verausgabung〕」
- 15) 「流過程および生産過程」→「再生産過程」

46 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

- 16) 「復歸した」→「還流した」
- 17) 「貸し手 [Verleiher]」——はじめ Leihcr と書いたが、それに Ver を付け加えて Verleiher にしている。
- 18) 「返済する [rückerstatten]」→「移す」
- 19) 「復歸 [die Rückkehr]」→「返済 [Rückzahlung]」
- 20) 「出発点—手放し、復歸点—返済」→「出発点と復歸点、手放しと返済」
- 21) 「というのは」——削除。
- 22) 「生産資本家」→「産業資本家」
- 23) 「からである」——削除。

第1の準備行為では貸し手が自分の資本を借り手 [Leihcr] に手放す。第2の補足的終結行為では借り手 [Leihcr] が資本を貸し手に返す。貸し手と借り手と<sup>1)</sup>のあいだの取引だけを考察するかぎりでは——そしてしばらく利子を無視すれば<sup>2)</sup>、つまり貸し手と借り手 [Leihcr] とのあいだでの貸される資本の運動だけを問題にするかぎりでは——<sup>3)</sup>、(資本の現実の運動<sup>4)</sup>が行なわれる)<sup>5)</sup>長短の時間によって分離されている<sup>6)</sup>この2つの行為がこの運動の全体を包括する。そしてそもそもこの運動、ある価値額の、その所有者から、この価値額を一定期間後に返済しなければならないある第三者への移転<sup>7)</sup>、《すなわち取り戻し<sup>8)</sup>を条件とする手放し》が、貸付と借受 [Leihen] の、すなわち、貨幣または商品のただ条件つきでの [conditionell] 譲渡というこの独自の形態の、運動なのである。<sup>++9)</sup>

- 1) 「貸し手 [Verleiher] と借り手 [Leihcr]」→「両者」なお、「貸し手」の Verleiher は、はじめ Leihcr と書いたが、それに Ver を付け加えて Verleiher にしているものである。
- 2) 挿入(次注の箇所からの移動)——「——」
- 3) 「——」——削除。(前注の箇所への移動)
- 4) 「運動」→「再生産運動」
- 5) 「)」——削除。(次注の箇所への移動)
- 6) 挿入(前注の箇所からの移動)——「)」
- 7) 「ある価値額の、その所有者から、この価値額を一定期間後に返済しなければならないある第三者への移転」——削除。
- 8) 「取り戻し [Rückerhalt]」→「返済 [Rückerstattung]」

- 9) 草稿ではこの「<sup>++</sup>」という記号によって、ノートの同じページの下半に書かれた部分に続くことが示されている。エンゲルスは、この続きの部分をそのまま本文に組み入れた。

|291下|<sup>++</sup> 資本の特徴的な運動は、貨幣の資本家への復帰である。資本のその出発点へのこの復帰<sup>1)</sup>は、利子生み資本では、この復帰という形態をとる現実の運動からは切り離された、まったく外面的な姿態を受け取る。Aが自分の貨幣を引き渡す<sup>2)</sup>のは、貨幣としてではなく、資本としてである。ここでは資本にはなんの変化も生じない。それはただ持ち手を取り替えるだけである。貨幣の資本への現実の転化は、Bの手によってはじめて行なわれる。しかし、Aにとってそれが資本となったのは、Bへのその<sup>3)</sup> たんなる手放しによってである。生産過程および流通過程からの資本の現実の還流 [Return] が生じるのはBにとって<sup>4)</sup> である。しかし、Aにとっては還流 [Return] は譲渡と同じ仕方<sup>5)</sup> で (たんなる返済として)<sup>6)</sup> 行なわれる。それはBの手からふたたびAの手に帰る。ある期間を限っての貨幣の手放し (貸付)<sup>7)</sup>、そして利子 (剰余価値) をつけてのその回収、これが利子生み資本そのものに固有な運動形態の全体である。貸し出された貨幣が資本として行なう現実の運動は、貨幣 [money] の<sup>8)</sup> 貸し手と借り手 [lender u. borrower] とのあいだの取引のかなたにある操作である。これらの取引<sup>9)</sup> では、この媒介は消えていて、見えなくなっており、直接にはそれに含まれていない。独特の種類の商品 [Waare sui generis] として、資本はまた特有な譲渡の形態<sup>10)</sup> をもっている。したがってまた、ここでは還流も一系列<sup>11)</sup> の経済的諸過程 [Prozesse] の帰結や結果として表現されるのではなく、買い手と売り手とのあいだの特殊な [besonder] 法律上の約定 [Convention] の結果として表現されるのである。還流 [Return] の時間は現実の生産過程<sup>12)</sup> にかかっている。利子生み資本では、資本としてのその還流は、貸し手と借り手 [Borger] とのあいだのたんなる約定 [Convention] によって定まるかのように見える<sup>13)</sup>。したがって、資本の還流 [Return] は、この取引に関してはもはや生産過程によ



って規定された結果としては現われないで、まるで、貨幣の形態が資本から瞬時もなくならない<sup>14)</sup>ように見える。たしかに<sup>15)</sup>これらの取引は現実の還流 [real returns] によって規定されている。しかし、このことは取引そのもののなかには現われない。<sup>16)</sup>経験上<sup>17)</sup>でもつねに現われない、というわけではけっしてない。もし現実の還流 [real return] が適時に行なわれないならば、借り手 [borrower] は、そのほかのどんな財源 [resources] から貸し手 [lender] にたいする自分の債務 [obligations] を履行すればよいかを考えなければならない。<sup>18)</sup>資本のたんなる形態<sup>18)19)</sup>、すなわち、Aという金額として引き渡されて、ある期間のうちに、引き渡しと返済とのあいだに経過するこの時間的間隔<sup>20)</sup>のほかにはなんの媒介もなしに、A+1/X A という金額として帰ってくる貨幣<sup>21)</sup>。現実の運動<sup>22)</sup>の無概念な形態<sup>23)</sup>。[+++]による追記部分の終わり]

- 1) 「資本の特徴的な運動は、貨幣の資本家への復帰である。資本のその出発点へのこの復帰」→「資本一般の特徴的な運動、すなわち貨幣の資本家への復帰、資本のその出発点への復帰」
- 2) 「引き渡す [ausgeben]」→「手放す [weggeben]」
- 3) 「そのの」——削除。
- 4) 挿入——「だけ」
- 5) 「仕方」→「形態」
- 6) 「(たんなる返済 [repayment] として)」——削除。
- 7) 「(貸付)」→「貸付」
- 8) 「貨幣の」——削除。
- 9) 挿入——「そのもの」
- 10) 「形態」→「仕方」
- 11) 「一列」→「一定の系列」
- 12) 「現実の生産過程」→「再生産過程の経過」
- 13) 「見える」——エンゲルス版でも強調されている。
- 14) 「瞬時もなくならない」→「まったくなくならなかった」
- 15) 挿入——「実際に」
- 16) 「{ } および { }」——削除。
- 17) 「経験上 [empirisch]」→「実際上 [in der Tat]」
- 18) 「形態」——エンゲルス版では強調されている。

- 19) 挿入——「——」  
 20) 「引き渡しと返済とのあいだに経過するこの時間的間隔」→「ある期間」  
 21) エンゲルス版では、ここに「——は、ただ」を挿入し、そのまま次の文に続けて  
 けている。  
 22) 「運動」→「資本運動」  
 23) 挿入——「でしかない」

/291上/ 資本の現実の運動では、復帰は流通過程の1契機である。まず貨幣が生産手段に転化させられる。それは生産過程の結果として商品になる<sup>1)</sup>。商品の販売によってそれは貨幣に転化させられ、この形態で、資本を最初に貨幣形態で前貸しした資本家の手に帰ってくる。ところが、利子生み資本の場合には、復帰も手放しも、ただ資本の所有者とある第三者<sup>2)</sup>とのあいだの法律上の取引の結果でしかない。それゆえまた、貨幣資本《家》[the monied capitalist] と生産資本家とのあいだの関係に関するかぎり、それはただ、貨幣の貸付（貨幣の手放し [Weggabe] 《手放し [Entäusserung]》<sup>3)</sup>）と借りられた貨幣の返済（その還流 [Return]）として現われるだけである<sup>4)</sup>。その間に生じたことは、すべて消えてしまっている。

- 1) 「それは生産過程の結果として商品になる」→「生産過程はそれを商品に転化する」  
 2) 「第三者」→「第二の人」  
 3) 「手放し [Weggabe] 《手放し [Entäusserung]》」——Entäusserung は草稿の第5章のこの「1)」の部分では、Weggabe (手放し) とほとんど同義で使われている。  
 4) 「それゆえまた、貨幣資本《家》[the monied capitalist] と生産資本家とのあいだの関係に関するかぎり、それはただ、貨幣の貸付（貨幣の手放し《手放し [Entäusserung]》）と借りられた貨幣の返済（その還流 [Return]）として現われるだけである。」→「われわれに見えるのは、ただ手放しと返済だけである。」

しかし、資本として前貸しされる貨幣は、それを前貸しする人、すなわちそれを資本に転化する（支出する）<sup>1)</sup> 人の手に帰ってくるという属性もっているのだから、G\_W\_G' が資本運動の内在的形態なのだから、<sup>2)</sup>

貨幣所持者は、貨幣を、資本として、すなわち自分の出所<sup>3)</sup>に帰るという属性、<sup>4)</sup>運動のなかで自分を価値として維持する [すして増殖する]<sup>5)</sup> という属性をもつものとして、貸し付けることができるのである。彼がそれを資本として手放すのは、それが資本として使われ<sup>6)</sup>、その出発点に復帰する<sup>7)</sup>からであり、つまり、まさにそれが借り手 [Leih] 自身のもとに還流するからこそある時間の後には借り手から返済されることができるからである。

- 1) 「転化する (支出する)」→「支出する」
- 2) 挿入——「まさにそれだからこそ」
- 3) 「出所 [source]」→「出発点」
- 4) 挿入——「自分が通り抜ける」
- 5) 「{ } および 「 」 」——削除。
- 6) 挿入——「たあとで」
- 7) 「復帰する [zurückkehren]」→「還流する [zurückfließen]」

《だから、》資本としての貨幣の貸付——ある期間の後に返済されるという条件での貨幣の手放し——は、<sup>1)</sup>貨幣が資本として使用され現実にその出発点に還流するということにもとづいている<sup>2)</sup>のである。つまり、資本としての貨幣の現実の循環運動 [Cirkelbewegung] は、貸し手から引き渡された貨幣が彼に還流しなければならない<sup>3)</sup>という法律上の取引に前提されている<sup>4)</sup>のである。<sup>5)</sup>借り手 [Leih] がその貨幣を資本として引き渡さなくても<sup>6)</sup>、それは彼のかってである。貸し手は貨幣を資本として貸すのであり、したがって貨幣は資本の諸機能を果たさなければならないのであって、貨幣の循環運動つまり自分の出発点への貨幣の還流は、これらの機能を含んでいるのである。<sup>7)</sup><sup>8)</sup>

- 1) ここに「現実に」を挿入。
- 2) 「にもとづいている」→「を前提とする」
- 3) 「貸し手から引き渡された貨幣が彼に還流しなければならない」→「借り手が貸し手に貨幣を返さなければならない」
- 4) 「に前提されている」→「の前提である」

- 5) 「〔 〕および〔 〕」——削除。  
 6) 「引き渡さなくても」→「投じなくても」  
 7) 「したがって 貨幣は資本の 諸機能を果たさなければならないのであって、貨幣の循環運動〔Zirkelbewegung〕、つまり自分の出発点への貨幣の還流は、これらの機能を含んでいるのである。」→「資本としては貨幣は資本諸機能を果たさなければならないのであって、これらの資本機能は、自分の出発点に貨幣形態で還流するまでの貨幣資本の循環を含んでいるのである。」

資本<sup>1)</sup>が貨幣として、あるいは商品として機能する 流通行為 G\_W および W\_G' は、ただ媒介的過程でしかなくその総運動の個々の契機でしかない。資本としてはそれは運動<sup>2)</sup> G\_G' をなしとげるのである。それは、貨幣 (3) またはなんらかの形態の価値額<sup>3)</sup>として前貸しされて、価値額として帰ってくる。貨幣の所有者<sup>4)</sup>は、それを貨幣と引き換えに売るのでなく、資本として、G\_G' として、一定の期限後に<sup>5)</sup>ふたたびその出発点に帰る貨幣 (価値)<sup>6)</sup>として、前貸しするのである。だから、それで<sup>7)</sup>買ったり売ったりするのではなく、彼はそれを<sup>8)</sup>貸すのである。つまり、この貸付は、それを貨幣や商品としてではなく資本<sup>9)</sup>として譲渡するための適当な形態なのである。(10)だからといって、貸付が資本主義的な過程<sup>11)</sup>とは無関係な取引のための形態ではありえない、というわけではけっしてない。)<sup>10)</sup>

- 1) 「資本」→「価値額」  
 2) 「運動」→「総運動」  
 3) 「〔 〕および〔 〕」——削除。  
 4) 「所有者〔Eigner〕」→「貸し手」  
 5) 「後に」→「内に」  
 6) 「貨幣 (価値)」→「価値」  
 7) 「だから、それで」——削除。  
 8) 「それを」——削除。  
 9) 「資本」——エンゲルス版でも強調されている。  
 10) 「〔 〕および〔 〕」——削除。  
 11) 「過程」→「再生産過程」

| 292上 | <sup>1)</sup> これまでの考察は、所有者と生産資本家とのあいだでの貸付

資本の運動にかかわるだけである<sup>2)</sup>。こんどは利子<sup>3)</sup>を考察しなければならない。

- 1) エンゲルス版では、このパラグラフのまえに、区切りを示す横線が引かれている。
- 2) 「これまでの考察 [Das bisher Betrachtete] は、所有者と生産資本家とのあいだでの貸付資本の運動にかかわるだけである」→「これまででは、所有者と産業資本家とのあいだでの貸付資本の運動だけを考察してきた」(エンゲルス版では、「資本」が強調されている。
- 3) 「利子」——エンゲルス版でも強調されている。

貸し手は自分の貨幣を資本として引き渡す。彼が第三者<sup>1)</sup>に譲渡する商品<sup>2)</sup>は、資本であって、だからこそ彼のもとに還流する [retourniren] のであり、売られるのではなくて、一定期間貸し付けられるだけである<sup>3)</sup>。しかし、その額が<sup>4)</sup>ただ帰ってくるだけでは、それは貸し付けられた価値額の資本としての<sup>5)</sup> 還流 [return] ではなくて、貸し付けられた価値額のたんなる返済であろう。資本として還流する [retourniren] ためには、ただ前貸しされた価値額が、運動のなかで自分を維持しただけではなく、運動のなかで<sup>6)</sup>自分を増殖し、その価値量をふやしていなければならない、つまり剰余価値を伴って、 $G + \Delta G$  として帰ってこなければならない。そして、この  $\Delta G$  はここでは、利潤(平均利潤)のうち機能資本家の手のなかに留まっていないで貨幣資本家 [monied capitalist] のものになる部分としての、利子<sup>7)</sup> である。

- 1) 「第三者」→「他人」
- 2) 「商品」→「価値額」
- 3) 「のであり、売られるのではなくて、一定期間貸し付けられるだけである」——削除。
- 4) 挿入——「彼の手」
- 5) 「資本としての」——エンゲルス版でも強調されている。
- 6) 「運動のなかで」——削除。
- 7) 「利潤(平均利潤)のうち機能資本家の手のなかに留まっていないで貨幣資本家 [monied capitalist] のものになる部分としての、利子」→「利子、すな

わち平均利潤のうち機能資本家の手のなかに留まっていなくて貨幣資本家のものになる部分」

それが資本として彼によって譲渡されるということは、それが  $G + \Delta G$  として彼に還流させ<sup>1)</sup>られなければならないということである。〔<sup>2)</sup> 中間の時期に利子は還流する [retourniren] が、資本は還流しない<sup>3)</sup> という形態は、あとでもう一度別に考察されなければならない。〕<sup>2)</sup>

- 1) 「還流させる [retourniren]」→「返す」
- 2) 「{ } および [ ]」——削除。なお、草稿では「{ }」は「[ ]」となっている。
- 3) 挿入——「で、その返済はもっと長い期間が終わってからのはじめて行なわれる」

貨幣資本家 [monied Capitalist] は、借り手 [Leih] である生産資本家<sup>1)</sup>になにを与えるのか？ 前者は後者に実際にはなにを譲渡するのか？ そして、ただ譲渡という行為だけが、貨幣の貸付を、資本としての貨幣の譲渡に、すなわち商品としての資本そのもの<sup>2)</sup>の譲渡に、するのである。

- 1) 「生産資本家」→「産業資本家」
- 2) 「そのもの」——削除。

資本が貨幣の貸し手によって——貨幣資本 [monied Capital] の形態で [——]<sup>1)</sup> 商品として手放されるということ、または、彼の自由に使える商品が第三者に資本として手放されるということは、ただこの譲渡という過程 [Prozess] によってのみ行なわれるのである。

- 1) 「——貨幣資本 [monied Capital] の形態で [——]」——削除。

普通の販売ではなにが譲渡されるのか？ 売られる商品の価値ではない。なぜならば、この価値はただ形態を変えるだけだからである。この価値は、reellに貨幣の形態で売り手の手に移る前に、価格として ideellに商品のなかに存在している。同じ価値、そして同じ価値量が、ここではただ形態を取り替えるだけである。同じ価値、同じ価値量が一度は商品形態で存在し、もう一度は貨幣形態で存在する。現実に売り手によって譲渡される

54 「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について

(<sup>1)</sup> したがってまた買い手の個人的または生産的商品にはいって行く)<sup>1)</sup> ものは、商品の使用価値であり、使用価値としての商品である。

1) 「(」および「)」——削除。

それでは、貨幣資本家 [monied capitalist] が貸出期間中譲渡して、借り手 [Leihher] である生産資本家に譲る使用価値は、なになのか?<sup>1)</sup>

1) エンゲルス版では改行していない。

[それは、] 貨幣が資本に転化させられることができ、資本として機能することができる、ということによって、したがってまた、貨幣が自分の元来の価値量を維持し、保存する<sup>1)</sup> ことを別として<sup>2)</sup>、その運動中に一定の剰余価値——<sup>3)</sup> 平均利潤 (それよりも大きかったり小さかったりすることはここでは偶然として、また資本としての資本の機能 [にとっては]<sup>4)</sup> 外面的なこととして<sup>5)</sup> 現われる) [——] を生むということによって、貨幣が受け取る使用価値 [である]。<sup>6)</sup>

1) 「維持し、保存する [erhalten, conserviren]」→「保つ [wahren]」

2) 「ことを別として」→「ほかに」

3) 「——」→「,」

4) 「[にとっては]」——この箇所の原文はそのままでは読みたい。次のように für を補って読みたい。(was darüber od. darunter ist, erscheint hier zufällig u. [für] d. Function d. Capitals als Capitals äusserlich)

5) 「また資本としての資本の機能 [にとっては] 外面的なこととして」——削除。

6) 挿入——「ほかの商品の場合には、最後の手のなかで使用価値は消費され、したがって商品の実体はなくなり、またそれといっしょに商品の価値もなくなってしまふ。ところが、資本という商品は、その使用価値の消費によってその価値もその使用価値もただ維持されるだけでなく増殖もされるという特性もっているのである。」(この挿入部分は、草稿のなかのどこかからかもってきたものかもしれない。しかし、発見できなかった。)

このような、資本としての貨幣の使用価値——平均利潤を生むという<sup>1)</sup> ——を貨幣資本家 [monied Capitalist] は貸付の<sup>2)</sup> 期間だけ生産<sup>3)</sup> 資本家に譲渡するのであって、この期間中は、前者は後者に貸し付けた資本の処分能力<sup>4)</sup> を譲るのである。

- 1) 挿入——「能力」
- 2) 「貸付 [Anleihe] の」——削除。
- 3) 「生産」→「産業」
- 4) 「処分能力 [Dispositionsfähigkeit]」→「処分 [Verfügung]」

このようにして貸し付けられる貨幣は、そのかぎりでは、労働能力が生産<sup>1)</sup> 資本家にたいしてもつ地位<sup>2)</sup> と次のような<sup>3)</sup> 類似点をもっている。(4) ただし、後者は労働能力<sup>5)</sup> の価値を支払うのであるが、生産資本家は<sup>6)</sup> 貸し付けられた資本の価値を単純に返済するのである。)<sup>4)</sup> 生産資本家<sup>7)</sup> にとっては、それ〔労働能力〕の使用価値は、それ〔労働能力〕自身もっているよりも、またそれ〔労働能力〕に費やされるよりも、より多くの価値(利潤)をその消費〔Consumption〕のなかで生みだすということである。交換価値<sup>8)</sup> のこの超過分が生産資本家<sup>9)</sup> にとってのそれ〔労働能力〕の使用価値である。こうして同様に、前貸しされた<sup>10)</sup> 貨幣資本の使用価値も、やはり《交換》価値を生んでふやすというその能力として現われるのである。]

- 1) 「生産」→「産業」
- 2) 「労働能力が生産資本家にたいしてもつ地位」→「産業資本家にたいする地位から見た労働力」
- 3) 「次のような」→「一種の」
- 4) 「( ) および「 」」——削除。
- 5) 「労働能力」→「労働力」
- 6) 「生産資本家は」→「彼は」
- 7) 「生産資本家」→「産業資本家」
- 8) 「交換価値」→「価値」
- 9) 「生産資本家」→「産業資本家」
- 10) 「前貸しされた」→「貸し付けられた」

[293上] 貨幣資本家 [monied capitalist] は、じっさい、ある使用価値を譲渡するのであって、そうすることによって、彼が手放すものは商品として手放されるのである。そして、そのかぎりでは、商品としての商品との類似は完全である。1) 一方の手から他方の手に移るものは価値である。



普通の<sup>1)</sup> 商品, 商品としての商品の場合には, 買う人の手にも売る人の手にも同じ価値が留まっている。というのは, 彼らは両方とも相変わらず, 自分たちが譲渡したのと同じ価値を, ただし異なった形態で, つまり一方は商品形態で, 他方は貨幣形態で, 取り戻すのだからである<sup>2)</sup>。区別は,<sup>3)</sup> ただ貨幣資本家 [monied capitalist] のほうだけがこの取引で価値を渡してしまうということであるが, しかし彼は,<sup>4)</sup> 返済 [repayment] によってこの価値を保持する [conserviren] ののである。<sup>5)</sup> 一方の側だけによって価値が受け取られることができる<sup>6)</sup> のであるが, それは, この貸付という取引においては<sup>7)</sup>, 一方の側だけによって価値が手放されるからである。

2) 一方の側では現実の使用価値が譲渡され, 他方の側ではそれが受け取られて消費される [erhalten und konsumiert werden]。しかし, 商品としての商品<sup>8)</sup> の場合とは違って, この使用価値はそれ自身が交換価値<sup>9)</sup> である。すなわち, (<sup>10)</sup>貨幣を資本として)<sup>10)</sup>使用することによって生じる価値量<sup>11)</sup>が貨幣の元の価値を越えるその超過分である。利潤はこの使用価値である。

- 1) 「普通の」→「単純な」
- 2) 「留まっている。というのは, 彼らは両方とも相変わらず, 自分たちが譲渡したのと同じ価値を, ただし異なった形態で, つまり一方は商品形態で, 他方は貨幣形態で, 取り戻す [zurückerhalten] のだからである。」→「留まっている, それがただ形態を異にしているだけである。彼らは両方とも, 相変わらず, 自分たちが譲渡したのと同じ価値を, 一方は商品形態で, 他方は貨幣形態で, もっている。」
- 3) 挿入——「貸付の場合には」
- 4) 挿入——「将来の」
- 5) 挿入——「貸付の場合には」
- 6) 「受け取られることができる [zu erhalten sein]」→「受け取られる [empfangen werden]」
- 7) 「この貸付という取引においては」——削除。
- 8) 「商品としての商品」→「普通の商品」
- 9) 「交換価値」→「価値」
- 10) 「(「」および「」)」——削除。

## 11) 「価値量」→「価値」

貸し出される貨幣の使用価値は、資本として機能することができるということ、資本として平均的事情のもとでは平均利潤を生産するということである。<sup>a)</sup>/

|293下|〔原注〕a) 「利子を取ることの正当さは、人が利潤をあげるかどうかによって定まるのではなく、それ(借りられるもの)「が正しく使われれば利潤を生むという能力があるということによって定まるのである。」(『自然的利子率を支配する諸原因に関する一論。この論題に関するサー・W・ペティとロック氏の意見の検討』、ロンドン、1750年、49ページ。)(この書の匿名の筆者は、J・マッシーである。)[原注 a)の終り]/

/293上/ では、生産資本家<sup>1)</sup>はなにを支払うのか? したがってまた、貸し出される資本の価格はなになのか? 「人々が借りたものの使用にたいする利子として支払うもの」は、<sup>2)</sup>「それ」(借りられた貨幣[d. geliehne Geld])<sup>3)</sup>「が生産することのできる利潤の一部分」である。b)/

- 1) 「生産資本家」→「産業資本家」
- 2) 挿入——「マッシーによれば」
- 3) 「(借りられた貨幣)」——削除。

/293下/〔原注〕b) 同前。「富者たちは、……彼らの貨幣を自分では使わないで……それを他の人々に貸し出し、これによって他の人々は利潤をあげ、こうしてあげた利潤の1部分を所有者のために保留する。」(同前、23ページ。)[原注 b)の終り]|

/293上/ 普通の商品の買い手が買うものは、その使用価値である。彼が支払うものは、その商品の交換価値<sup>1)</sup>である。貨幣の借り手 [Leih] が買うものも、やはり、貨幣の資本としての使用価値 (使用)<sup>2)</sup>である。しかし、彼はなにを支払うのか? たしかに、商品の場合とは違って、そ

の価格または価値ではない。貸し手と借り手とのあいだでは、買い手と売り手とのあいだでは違って、価値の形態変換は、したがってこの価値が一度は貨幣の形態で存在しもう一度は商品の形態で存在するということは、行なわれない。手放される価値と取り戻される価値との同一性は、ここではまったく別の仕方で見られる。価値額 (<sup>89</sup>貨幣)<sup>89</sup>は、等価なしに渡されてしまっ、ある期間の後に返され、返済される。<sup>42</sup>貸し手が、自分が手放すのと同じ価値を取り戻すのは、ただ、こうした仕方、つまり<sup>89</sup>、貸し手は実際に<sup>89</sup>いつでも同じ価値の所有者であって、この価値が彼の手から借り手の手に移ったあとでもやはりそうである、という仕方ではない。<sup>79</sup>単純な商品の場合の関係との次のような違いが明らかになる。ここでは<sup>89</sup>、貨幣はつねに買い手の側にある。ところが、貸付の場合には貨幣は売り手のがわにある。売り手は貨幣をある期間譲渡し<sup>100</sup>、手放すのであり、資本の買い手はそれを商品として受け取るのである。しかし、こういうことが可能なのは、ただ、貨幣が資本として機能し、したがってまた前貸しされるかぎりでのことである。} <sup>89</sup>借り手が貨幣を借りる[leihen]のは、資本としてであり、自分を増殖する価値としてである。しかし、それが資本であるのは、どの資本でもその出発点で、その第1の前貸の瞬間にそうであるように、まだやっと即自的にでしかない。その使用によってはじめてそれは増殖され、資本として実現されるのである。ところが、借り手はそれを実現された<sup>111</sup>資本として、つまり価値・プラス・剰余価値(利子)として、返済しなければならぬ。そして、このあとのほうのものは、ただ彼によって実現された利潤の1部分でしかありえない。ただ1部分だけであって、全部ではない。というのは、使用価値は借り手にとっては<sup>123</sup>、それが彼のために利潤を生産することだからである。そうでなければ、貸し手の側での<sup>133</sup>使用価値の譲渡は行なわれなかったであろう。しかし<sup>140</sup>、利潤が全部借り手のものになるわけにはいかない。もしそうなるのであれば、彼は使用価値の譲渡にたいしてなにも支払わないことになり、前貸された貨幣を貸し手に資本として、実現された資本として、還流させ

る<sup>15)</sup>のではないということになるであろう。というのは、それが実現された資本であるのは、ただ  $G+\Delta G$  としてのみだからである。

- 1) 「交換価値」→「価値」
- 2) 「(使用 [the use])」——削除。
- 3) 「(「」および「」)」——削除。
- 4) 「返済され」——削除。
- 5) 「貸し手が、自分が手放すのと同じ価値を取り戻すのは、ただ、こうした仕方、つまり」——削除。
- 6) 「実際に [in der That]」
- 7) 「という仕方ではない」——削除。
- 8) 「{「」および「}」——削除。
- 9) 「の関係との、次のような違いが明らかになる。ここでは」——削除。
- 10) 「譲渡し」——削除。
- 11) 「実現された」——エンゲルス版では強調されている。
- 12) 「使用価値は借り手にとっては」→「借り手にとっての使用価値は」
- 13) 「貸し手の側での [auf seiten d. Verleihers]」→「貸し手の側からの [von seiten des Verleihers]」なお、「貸し手」の Verleiher は、はじめ Leihner と書いたが、それに Ver を付け加えて Verleiher にしているものである。
- 14) 「しかし」→「他方では」
- 15) 「還流させる [retourniren]」→「返す」

貸し手も借り手も、両方とも同じ貨幣額を資本として支出する。しかし、ただ後者の手のなかだけでそれは資本として機能する。利潤は、同じ貨幣額が2人の人にとって二重に資本として定在することによっては、2倍にはならない。それが両方の人にとって資本として機能することができるのは、利潤の分割によるよりほかはない。貸し手のものになる部分は利子と呼ばれる。|

|294上| 前提によれば、全取引は2つの種類の資本家のあいだで、すなわち貨幣資本家 [monied Capitalist] と生産資本家<sup>1)</sup>とのあいだで、行なわれる。

- 1) 「生産資本家」→「産業資本家または商業資本家」

資本がここではそれ自身商品として現われるとすれば、この場合<sup>1)</sup>、忘

れてはならないのは、<sup>2)</sup> 資本は資本として商品なのだという、言い換えれば、ここで問題になっている商品は資本なのということである。それゆえ、ここで現われるすべての関係は、単純な商品の立場から見れば、または資本の立場から見ても、資本がその総過程<sup>3)</sup> で商品資本として機能するかぎりでは、不合理であろう。貸付《と借受》であって売買ではないということが、ここでは、商品——資本——の独自の性質から出てくる区別である。また、ここで支払われるものが利子であって商品の価格ではないということも、そうである。もしも利子を貨幣資本の価格と名付けようとするならば、それは価格の不合理な形態であって、商品の価格の概念とはまったく矛盾している。<sup>4)</sup><sup>5)</sup> 資本としての資本が自分を表明する<sup>6)</sup>のは、その価値増殖によってである。その価値増殖の<sup>7)</sup> 程度は、それが資本として(量的に)<sup>8)</sup>実現される程度を表現している。この<sup>9)</sup>剰余価値または利潤——その率または高さ——は、ただ利潤を<sup>10)</sup>前貸資本の価値と比較することによってのみ計ることができる。したがってまた、利子生み資本の価値増殖の大小も、利子の高さ(<sup>11)</sup>総利潤のうちからその資本のものになる部分)<sup>11)</sup>を、前貸資本の価値と比較する[messen]ことによってのみ、計ることができる。それゆえ、価格が商品の価値を表わすように<sup>12)</sup>、利子は貨幣資本[monied Capital]の価値増殖を表わすのであり、だからまた、それ[貨幣資本]にたいして貸し手[Ausleiher]に支払われる価格として現われるのである。<sup>13)</sup>

- 1) 「資本がここではそれ自身商品として現われるとすれば、この場合」——削除。
- 2) 挿入——「ここでは」
- 3) 「総過程」——「再生産過程」
- 4) 草稿では、この「<sup>8)</sup>」によって指示した注そのもの(2パラグラフ)のなかにさらに注「<sup>6)</sup>」(2パラグラフ)をつける、という構造になっているが、エンゲルスはこの注の一部を本文に組み込み、一部を脚注にした。草稿とエンゲルス版との関係は次の通りである(「b」)にあたるものは、注番号も注そのものも、存在しない)。

## 注 a)

第1 パラグラフ → 本文 (MEW, Bd. 25, S. 366, Z. 20-24)  
(本稿61ページ22行以下)

第2 パラグラフ → 注記号「<sup>82</sup>」の付けられた箇所への注  
(本稿61ページ28行以下) (注59)

## 注 c) (上の第2 パラグラフ末尾への注)

第1 パラグラフ → 本文 (MEW, Bd. 25, S. 366, Z. 21-S.  
(本稿62ページ4行以下) 367, Z. 11)

第2 パラグラフ → 上の本文末尾への注 (注60)  
(本稿63ページ6行以下)

- 5) 以下の部分は、現行版では、MEW, Bd. 25, S. 367, Z. 12 以下にあたる。
- 6) 「資本としての資本が自分を表明する」→「資本が自分が資本であることを表明する」
- 7) 挿入——「量的に」
- 8) 「(量的に)」——削除。
- 9) 「この」→「資本によって生みだされる」
- 10) 「利潤を」→「それを」
- 11) 「(」および「)」——削除。
- 12) 「ように [wie]」→「とすれば [wenn]」
- 13) エンゲルス版では改行していない。

|294下| [原注] a) ここでは、価格は、使用価値としてなんらかの仕方で働くなんらかのものにたいして支払われる一定の貨幣額だというその純粋に抽象的で無内容な形態に還元されているのであるが、価格の概念から見れば、価格は、この使用価値の交換価値<sup>1)</sup>を貨幣で表わしたものである。

- 1) 「交換価値」→「価値」

「通貨に適用される価値という術語には3つの意味がある。……第2には、後日受け取られるべき同一額の通貨と比べての、現実に手にしている通貨。この場合には、通貨の価値は利子率によって計られており、また利子率は貸付可能資本 [loanable capital] とそれにたいする需要との割合

によって、規定されている。」(R・トレنز『1844年の銀行特許法の、商業信用に影響するような運用について』、第2版、ロンドン、1847年、5ページ。〔 〕<sup>61</sup> (下方)〔原注 a) の終り〕/

/294下/〔原注 c)〕<sup>1)</sup> 資本の価格としての利子というのは、もともと [de prime abord] まったく不合理な表現である。ここでは1つの商品が二重の価値をもっている。すなわち、まず第1にある価値をもち、次にはこの価値とは違った価格をもっている。他方では、価格とは価値の貨幣表現 [d. monetary expression of value] なのである。<sup>2)</sup> 《貨幣》資本は、さしあたりは、ある貨幣額にほかならない。または、一定の価値量<sup>3)</sup>の価値が貨幣額として固定されたものにほかならない。もし商品が資本として貸し付けられるとすれば、その商品は、ただ、ある貨幣額の仮装形態でしかない。というのは、資本として貸し付けられるものは重量何ポンドかの綿花ではなく、綿花という形態のなかに (<sup>4)</sup> 綿花の価値として)<sup>4)</sup> 存在するいくらかの額の貨幣だからである。それゆえ、資本の価格は、トレنز氏の言うように<sup>5)</sup> 通貨としてののではないにしても、貨幣額としての資本に関連する。<sup>6)</sup> いったいどうして、ある価値額は、<sup>7)</sup> それ自身の貨幣形態で表わされている価格のほかに、ある価格をもつのか？ 価格とは、商品の使用価値から区別された商品の価値のことなのだから。(そして市場価格の場合もやはりそうであって、市場価格と価値との相違は、質的ではなく、ただ量的であるだけであって、ただ価値量に関連するだけである。) 価値と質的に異なるものとしての<sup>8)</sup> 価格というものは、名辞矛盾<sup>9)</sup> である。

- 1) このパラグラフは、現行版では、MEW, Bd. 25, S. 366, Z. 25-S. 367, Z. 11にあたる。
- 2) 草稿では、ここに不要と思われる「 ）」がある。
- 3) 「価値量 [Werthmasse]」→「商品量 [Warenmasse]」(これはもともとマルクスの誤記だったのであろう。)
- 4) 「( ）」および「 ）」——削除。
- 5) 挿入——「(前の注59を見よ)」〔注59〕は、草稿では、直前のトレنزから

の引用からなるパラグラフにあたる。

- 6) 挿入——「では、」
- 7) 挿入——「それ自身の価格のほかに、」
- 8) 「ものとしての」——削除。
- 9) 「名辞矛盾 [eine contradictio in terminis]」→「ばかげた矛盾」

<sup>1)</sup> 「貨幣または通貨の価値という言葉が、現に見られるように、商品と交換されるさいの価値と、資本として使用されるさいの価値との両方を表わすために無差別に使用されるならば、この言葉の両義性は混乱 [confusion] の絶えざる源泉である。」(トゥック『通貨原理の研究』, 77ページ。) 交換価値としての交換価値(利子)が資本の使用価値になる {このことによって、資本は、交換価値を生みだす使用価値をもつ労働能力と同一視される}<sup>2)</sup> という主要な混乱(事柄そのものうちにある<sup>3)</sup>)がトゥックにはわからないのである。[原注c)の終り]

- 1) このパラグラフは、エンゲルス版では、注60となっている。
- 2) 「[このことによって、資本は、交換価値を生みだす使用価値をもつ労働能力と同一視される]」——削除。
- 3) 「事柄そのものうちにある」in der Sache selbst→die in der Sache selbst liegt

/294上/ <sup>1)</sup> このことから明らかなように、<sup>2)</sup> 貨幣によって媒介される交換、つまり買い手と売り手<sup>3)</sup> という単純な諸関係を直接にこの場合に適用しようとすることは、じつにはじめからばかげたことなのである。根本前提は、<sup>4)</sup> 貨幣が資本として機能するということ、したがってまた資本(即自的な)<sup>5)</sup> として、<sup>6)</sup> 第三者に引き渡されることができるといことなのである。

- 1) ここは草稿では、本稿60ページ20行に続く部分である。エンゲルス版では、改行なしに続けられている。
- 2) 挿入——「ブルドンがやっているように」
- 3) 「つまり買い手と売り手」→「売買」
- 4) 挿入——「まさに、」
- 5) 資本(即自的な) [Capital (an sich)] →「即自的資本 [Kapital an sich]」



6) 挿入——「潜勢的〔potentiell〕資本として」

しかし、ここで資本そのものが商品として現われるのは、資本が市場で売り出されて資本としての貨幣の使用価値が現実に譲渡されるかぎりでのことである。しかし、資本の使用価値そのもの<sup>1)</sup>は、利潤を生む〔setzen〕ということである。<sup>++)2)</sup>/

1) 「そのもの」——削除。

2) エンゲルス版では、改行せずに、すぐ次の「++）」の部分に続ける。

/294下/ <sup>++)</sup> 資本としての貨幣または商品の価値は、貨幣または商品としてのそれらの価値によってではなく、それらがそれらの所持者のために「<sup>1)</sup>生産する」<sup>1)</sup> 剰余価値量によって規定されている。資本の生産物は利潤である。貨幣が貨幣として支出されるか、それとも資本として支出される<sup>2)</sup>かは、資本主義的生産の基礎のうえでは、ただ貨幣の使い方の相違でしかない。貨幣(商品)<sup>3)</sup>は、即自的に<sup>4)</sup>資本なのである(それはちょうど労働能力が即自的に労働であるようなものである)<sup>5)</sup>。というのは、1) 貨幣は生産諸条件<sup>6)</sup>に転化させられる<sup>7)</sup>ことができ、そのままそれら〔生産諸条件〕のたんに抽象的な表現であり、それら〔生産諸条件〕の価値としての定在だからである。また<sup>8)</sup>、2) 富の对象的<sup>9)</sup>諸要素は、資本であるという属性を即自的に<sup>10)</sup>もっているからである。なぜならば、<sup>11)</sup> それらの対立物——賃労働——が、それらを資本にするものが<sup>12)</sup>、社会的生産の基礎として<sup>13)</sup>現存しているからである。<sup>14)</sup> 労働に対立する对象的富の対立的な社会的規定性<sup>15)</sup>は、過程そのもの<sup>16)</sup>から引き離されて、<sup>17)</sup> 資本所有そのものに表現されている。この1契機、それは資本主義的生産過程の恒常的な結果であり、またこの過程の恒常的な結果としてこの過程の恒常的な前提なのであるが、この契機は、もっぱら、資本主義的生産過程そのものからは引き離されて、次のことに表わされているのである。すなわち、貨幣、<sup>18)</sup> 商品は、即自的に、潜在的に〔latent〕、<sup>19)</sup> 資本であるということ、それは<sup>20)</sup> 資本として売られることができるということ、また、それらがこ

の形態では他人の労働にたいする指揮権であり<sup>21)</sup>、したがってまた自分を増殖する価値であるということである〔他人の労働の取得への要求権<sup>22)</sup>〕。ここではまた次のことも明らかになる。すなわち、この関係は他人の労働を取得するための権原および手段であり、<sup>23)</sup> 資本家の側からの対価としてのなんらかの労働ではないということである。〔<sup>++</sup>による追記部分の終り〕/

- 1) 「「」および「」」——削除。
- 2) 「支出される」→「前貸される」
- 3) 「(商品)」→「もしくは商品」
- 4) 挿入——「潜勢的に〔potentiell〕」
- 5) 「(それはちょうど労働能力が即自的に労働であるようなものである)」→「それはちょうど労働力が潜勢的に〔potentiell〕資本であるようなものである。」
- 6) 「生産諸条件」→「生産諸要素」
- 7) 「転化させられる〔verwandeln werden〕」——verwandeln は明らかに verwandelt の誤記である。
- 8) 「また〔und〕」——削除。
- 9) 「对象的」→「素材的」
- 10) 「資本であるという属性を即自的に」→「潜勢的には〔potentiell〕すでに資本であるという属性を」
- 11) 挿入——「それらを補足する」
- 12) 「——賃労働——が、それらを資本にするものが」→「が、それらを資本にするもの——賃労働——が」
- 13) 「社会的生産の基礎として」→「資本主義的生産の基礎の上では」
- 14) エンゲルス版ではここで改行している。
- 15) 「労働に対立する对象的富の対立的な社会的規定性」→「素材的富の対立的な社会的規定性——それが賃労働としての労働に対立するという——」
- 16) 「過程そのもの」→「生産過程」
- 17) 挿入——「すでに」
- 18) 挿入——「同様にまた」
- 19) 挿入——「潜勢的に〔potentiell〕」
- 20) 「それは資本として売られることができる」——原文は、「es als Capital verkauft werden koennen」であって、主語(es)の数と定動詞(können)の数が一致していない。es...kann か sie...können かのどちらかでなければな

らない。

- 21) 挿入——「他人の労働の取得への要求権を与えるものであり」これは、次注の削除部分をここに組み込んだものである。
- 22) 「[他人の労働の取得への要求権]」——削除。
- 23) 挿入——「また」

/294上/ さらに、利子と《本来の》利潤とへの利潤の分割が、商品の市場価格と<sup>1)</sup>同様に、需要と供給 [Zufuhr] によって、つまり競争によって規制されるかぎりでも、資本は商品として現われる。しかし、ここでは区別も類似と同様にはっきりと現われている。需要と供給 [Zufuhr] とが一致すれば、商品の市場価格は生産価格に一致する。すなわち、そのとき商品の価格は、競争にはかかわりなく資本主義的生産の内的法則によって規制されるものとして現われる。というのは、需要と供給 [Zufuhr] の変動はそれらの<sup>2)</sup>生産価格からの市場価格の諸変倚のほかにはなにも説明するものではないからである。<sup>(3)</sup> これらの変倚は相殺されて、いくらか長い期間について見れば平均市場価格は生産価格に等しい。<sup>9)</sup> 需要と供給とが一致すれば、これらの力は一方の側にも他方の側にも<sup>4)</sup>作用しなくなり、麻痺させ合う<sup>5)</sup>のであって、そうなれば内在的な価格規定<sup>6)</sup>が個々の場合の法則として<sup>7)</sup>現われる。言い換えれば<sup>8)</sup>、その場合には市場価格は、<sup>9)</sup>その直接的定在において、<sup>(10)(11)</sup>ただだんに諸市場価格の運動の平均としてだけではなく<sup>10)</sup>、生産価格に一致する。労賃の場合にも同様である。需要と供給 [Zufuhr] とが一致すれば、それらの規定<sup>12)</sup>は相殺されて、労賃は労働能力<sup>13)</sup>の価値に等しい。ところが、貨幣資本 [monied Capital]<sup>14)</sup>はそうではない。ここでは競争が法則からの変倚を規定するのではなく、競争によって強制される法則よりほかには分割の法則は存在しないのである。なぜならば、のちに<sup>15)</sup>もっと詳しく見るであろうように、利子率<sup>16)</sup>自然的な<sup>17)</sup>率 [natural rate of interest] というものは存在しないからである。利子率の自然的な率 [d. natural rate of interest] というのは、むしろ、自由な競争によって確定されたもの<sup>18)</sup>のことである。利子率の<sup>19)</sup>自

然的<sup>20)</sup>限界 [natural limit of the rate of interest] というものはないのである。競争がただたんに変倚<sup>21)</sup>、変動 [Oscillationen] を規定するだけではない場合、つまり、競争の相反する諸力<sup>22)</sup>が均衡して [bei d. Equiposising], 規定することをやめて<sup>23)</sup>しまう場合には、規定されるべきものが、それ自体として無法則なもの、任意なものなのである。(24)しかし<sup>25)</sup>これについては2で<sup>26)</sup>もっと詳しく述べる。)24)

- 1) ここに「まったく」を挿入。
- 2) 「それらの」——削除。
- 3) 「(」および「)」——削除。
- 4) 「一方の側にも他方の側にも」——削除。
- 5) 「麻痺させ合う」→「たがいに相殺しあう」
- 6) 「内在的な価格規定」→「価格規定の一般的法則」
- 7) 挿入——「も」
- 8) 「言い換えれば [od.]」——削除。
- 9) 挿入——「すでに」
- 10) 「(」および「)」——削除。
- 11) 挿入——「そして」
- 12) 「規定」→「作用」
- 13) 「労働能力」→「労働力」
- 14) 「貨幣資本」→「貨幣資本の利子」
- 15) 「のちに」——削除。
- 16) 挿入——「「」
- 17) 挿入——「「」
- 18) 「もの」→「率」
- 19) 挿入——「「」
- 20) 挿入——「「」
- 21) 挿入——「や」
- 22) 「相反する諸力 [antagonistic forces]」→「反対に作用し合う諸力」
- 23) 「規定することをやめて」→「およそあらゆる規定がなくなって」
- 24) 「(」および「)」——削除。
- 25) 「しかし」——削除。
- 26) 「2で」→「次の章で」

利子生み資本ではすべてが外面的なものとして現われる——<sup>1)</sup>資本の前

貸は、貸し手<sup>2)</sup>から借り手への資本のたんなる移転〔transfer〕として現われ、実現された資本としての<sup>3)</sup>還流〔Return〕は、借り手から貸し手への利子をつけてのたんなる逆移転〔Retransfer〕(<sup>4)</sup>返済〔repayment〕<sup>4)</sup>として現われる——ように、<sup>5)</sup>〔利子生み資本では、〕利潤率は<sup>6)</sup>利潤の前貸資本価値にたいする割合によって規定されているだけではなく、利潤が実現される回転時間<sup>7)</sup>によっても規定されており、したがって生産資本<sup>8)</sup>が一定の期間にあげる利潤として規定されている、という資本主義的生産様式に内在する規定も、外面的なものとして現われる。利子生み資本の場合には、このことは<sup>9)</sup>まったく外面的に、一定の期間について売り手<sup>10)</sup>に一定の||295上|利子が支払われるというふうに、現われるのである。

- 1) 「——」→「, すなわち,」
- 2) 「貸し手〔Verleiher〕」——はじめ Leihher と書いたが、それに Ver を付けて Verleiher にしている。
- 3) 「としての」→「の」
- 4) 「(「および「)」——削除。
- 5) 「——ように,」→「。」
- 6) 挿入——「一度の回転で得られる」
- 7) 「利潤が実現される回転時間」→「この回転時間そのものの長さ」
- 8) 「生産資本」→「産業資本」
- 9) 「は」→「もまた」
- 10) 「売り手」→「貸し手」

事物の内的関連を見抜く彼の日ごろの洞察力をもって、ロマン派のA<sup>1)</sup>・ミュラーは次のようにいっている。——

- 1) 「A」→「アダム」

「物の価格の決定では時間は問題にならない。利子の決定では時間がおもに計算にはいる。」(アダム・H・ミュラー『政治学要論』, ベルリン, 1809年, 第2巻, 137, 138ページ。)

彼にわかっていないのは、労働時間<sup>1)</sup>や流通時間〔Circulationszeit〕が

《諸》商品の価格の規定にはいつてくるということ、そしてまさにこれによって資本の与えられた1回転時間についての利潤率が規定されているということ、しかしまた与えられた1時間についての利潤の規定によって<sup>2)</sup> 利子の規定も規定されているということである。彼の深い洞察は、ここでもまた、いつものように、ただ、表面の砂ぼこりを見てそれを大げさになにか秘密に満ちた重大なものでもあるかのように言い立てることだけにあるのである。/

- 1) 「労働時間」→「生産時間」
- 2) 挿入——「ほかならぬ」

(1988年6月30日)

——正 誤 表——

「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について(本誌第52巻第3・4号) 337(38) ページ15行目 「資本主義的産業」→「資本主義的私的産業」